

# 初期一条兼良古典学の成立に関する書誌学的研究

課題番号：一二六一〇四四一

平成12年度～平成13年度科学研究費補助金（基盤研究（C））（2）研究成果報告書

平成14年3月

研究代表者：武井和人（埼玉大学教養学部教授）

# 目次

はしがき	2頁
附載論文	
① 架蔵『藤河の記』『南都百首』小攷	5頁
② 公事根源諸本解題稿（『研究と資料』第44、46輯初出）	11頁

埼大コナ-

埼玉大学附属図書館



998005271

## ◇はしがき

一条兼良の初期古典学の著作の内、とりわけ著聞するものは、処女作『公事根源』であらう。けれども、『公事根源』を現在新刊本として入手することは出来ない。過去数度にわたつて活字化されて来たものの、現在ではいづれも絶版となつてゐるからである。また、『公事根源』それ自身の、書誌学的・文献学的研究は、全くなされて来なかつたといへよう。江戸期の注釈書を翻刻することで研究がとどまつてゐたのである。

報告者は、まず『公事根源』諸本の悉皆調査を目指すべく、伝本書目の作成からはじめ、二年間という短い期間ではあるが、八割方の諸本を調査することを得た。ただし時間的制約により、詳細な校合・校勘といふ作業はなし得なかつた。今後、校勘を施した上で『公事根源』を出版する予定があり、その折にまでは、諸本系統論及び校勘といつた基礎的作業を完遂させたい。

なほ、厳密にいへば『初期古典学』の範疇には入らないが、兼良古典学に関わる重要な新資料の発見があつたので、論文を一点公表し（後掲）、さらに一点は本報告書に書き下ろして所収した。

年度別の研究経過は以下の通り。

### 【平成12年度】

#### ●「公事根源」諸伝本の調査・写真撮影

以下の機関に所蔵されてゐる『公事根源』の諸伝本を、実地に書誌調査をし、必要なものは写真撮影をして紙焼を作成した。

静嘉堂文庫（二本）

名古屋蓬左文庫

前田育徳会尊経閣文庫（二本）

内閣文庫（二本）

旧東京教育大学（現筑波大学）附属図書館（国文学研究資料館蔵マイクロフィルムによる調査）

熊本大学附属図書館寄託北岡（永青）文庫（国文学研究資料館蔵マイクロフィルムによる調査）

上田市立図書館藤廬文庫（国文学研究資料館蔵マイクロフィルムによる調査）

臼杵市立図書館（国文学研究資料館蔵マイクロフィルムによる調査）

東山御文庫（宮内庁書陵部蔵マイクロフィルムによる調査）

宮内庁書陵部（八本）

京都大学（六本）

陽明文庫（二本）  
天理図書館（七本）

【平成13年度】

●「公事根源」諸伝本の調査・写真撮影（前年度からの継続）

以下の機関に所蔵されてゐる『公事根源』の諸伝本を、実地に書誌調査をし、必要なものは写真撮影をして紙焼を作成した。

（滋賀県西教寺）正教坊文庫（国文学研究資料館蔵マイクロフィルムによる調査）

順天堂大学医学部医史学研究室山崎文庫

西尾市立図書館岩瀬文庫（東京大学史料編纂所蔵写真帳による調査）

東京大学史料編纂所（四本）

東京大学総合図書館

東海学園大学名古屋キャンパス図書館哲誠（関山）文庫

名古屋大学附属図書館神宮皇学館文庫

京都府立総合資料館

大阪府立中之島図書館

金沢市立玉川図書館近世史料館加越能文庫

水府明德会彰考館（国文学研究資料館蔵マイクロフィルムによる調査）

二松學舎大学附属図書館

東京国立博物館資料館

国立歴史民俗博物館（二本）（紙焼写真版による調査）

●架蔵本「藤河の記・南都百首」の調査・試行的本文研究

今回の研究でたまたま入手することが出来た架蔵本について、書誌的研究を行った。本報告書に後掲。

●京都国立博物館蔵一条兼良自筆「權談治要」の調査・翻刻

従来、個人（豊田駒太郎）蔵として知られてゐた当該書が、近年、京都国立博物館の所蔵になったことを知り、原本を実地に調査し、全冊の写真版を入手し、添付文書等も含めて、全文の翻刻を行った（後掲「研究発表」(5)）。

◇研究組織

研究代表者：武井和人（埼玉大学教養学部教授）

◇研究経費

平成12年度 二、一〇〇千円

平成13年度 一、三〇〇千円

◇研究発表

- (1) 「東山御文庫藏『古今集釈義』攷―附翻刻・校異―」 (『研究と資料』43 || 二〇〇〇・七)  
↳ 補訂の上、拙著『一条兼良の書誌的研究 増訂版』(おつふう || 00・11) に収録
- (2) 「一条兼良書誌叢考(九)―『公事根源』を論ずる為に(一)―」 (『研究と資料』44 || 二〇〇〇・一二)
- (3) 「一条兼良書誌叢考(九)―『公事根源』を論ずる為に(二)―」 (『研究と資料』45 || 二〇〇一・七)
- (4) 「一条兼良書誌叢考(九)―『公事根源』を論ずる為に(三)―」 (『研究と資料』46 || 二〇〇一・一二)
- (5) 「京都国立博物館蔵一条兼良自筆『樵談治要』翻刻―附略解題―」 (『埼玉大学紀要 教養学部』37 | 2 || 二〇〇二・三)
- } 補訂・再編の上、本報告書に収録

## 架蔵『藤河の記』『南都百首』小攷

### 一、はじめに

筆者はかつて、兼良の数少ない文藝的著作である『南都百首』『藤河の記』に関して、伝本の整理を主とした書誌学的研究を発表したことがある。即ち、

①『南都百首』の成立」(『言語と文藝』87＝一九七九・三)

②『藤河の記』の成立—兼良論序説—」(『国語と国文学』一九八一・八)

※いづれも拙著『一条兼良の書誌的研究』(桜楓社「現社名」おうふう  
＝一九八七・四)に補筆の上再録。後者は『一条兼良の書誌的研究  
増訂版』(おうふう＝二〇〇〇・一一)に追補の上再々録。

この二論考である。

『南都百首』に関しては、前掲拙著以後、外村展子「南都百首」(『新編国歌大観 第十巻』(角川書店＝平4・4)所収)が著され、内閣文庫蔵(二〇一・四六一)本を底本にし、同蔵(二〇一・四五三)本を以て補ひつつ純良な本文が提供された。

また、『藤河の記』に関しては、外村展子「一条兼良藤河の記全釈」(風間書房＝昭58・5)に伝本研究の更なる深化が見られ、今日にいたつてゐる。

けれども、伝本研究に関しては概ね前掲拙著の見解を大きく変更するものはなかつた。

筆者は近時はからずも『藤河の記』『南都百首』が合写された一写本を入手出来たので、ここに簡単な紹介をして置き、現在の伝本研究における各本の位置付けをも試みてみたい。

### 二、架蔵本の書誌

架蔵本は『筑波書店古書目録 第72號 書筵』(01・2)に左記の如く所掲されてゐたものである。

一四七 一條禪閣藤川記・おなしく百首 薄葉美24丁 幕末写 一五〇、

〇〇〇

一條兼良著書2種を収録する。 図版77頁

(1)藤河の記 16丁 卷末に「本云 此一冊者後成恩寺禪閣於藤川記之給也 天文十三年季春中澣日 桃葉判アリ」とあり。

(2)詠百首和歌 8丁 卷末に「右百首一条禪閣詠作也 以自筆之本書写訖 于時文明第五仲秋下旬候」とあり。但類従本とは別系。(前掲目録・9頁)

ここに記載される如く、同目録・77頁には、『藤河の記』の冒頭部分(墨付1丁表)が写真版として掲げられてゐる。管見による限り、本書はこの目録以前に所在が確認されたことはない。その意味では、新出本と解して良からう。本文の検討に入る前に、架蔵本の書誌を記しておく。

袋綴装1冊。帙入。帙題簽が左に貼られ「一條禪閣藤川記・おなしく百首」と墨書される。この帙は近時(恐らく昭和になつてから)制作されたものと思はれる。27・1×19cm。表紙は黄土色無地の楮紙。題簽(墨流し文様)が以下の如く表紙左に二種貼られる(図版A参照)。

一條禪閣藤川記

おなしく百首

各々の題簽の寸法は、概ね、18×1・9cm。表紙・題簽とも原装かと思はれる。また題簽の筆跡も本文と同筆と見て良いか。内題は、『藤河の記』『南都百首』

ともに存しない。本文料紙は薄手の楮斐混漉。蔵書印は存しない。一面15行書。和歌は、『藤河の記』が二行書、『南都百首』が一行書。遊紙はなく、墨付は、『藤河の記』が16丁、『南都百首』が8丁、計24丁。『藤河の記』『南都百首』の奥書は各々以下の通り(図版D・E参照)。

〔藤河の記〕

本云

此一冊者後成恩寺禅閣於関藤川

記之給也

判アリ

天文十二年季春中泚日

桃葉

(六行分空白) 16丁裏

〔南都百首〕

右百首一条禅閣詠作也以自筆之本

書写訖于時文明第五仲秋下旬候

(二行分空白) 24丁裏

書写時期は、『筑波書店古書目録 第72號 書筵』が鑑定する如く、幕末と見て大きな誤りはなからうが、あるいは、若干それよりも古い(といつても化政期までは遡るまいが)かもしれない。

### 三、架蔵本書写相の検討

最後に、本書が『藤河の記』と『南都百首』を合写してゐる事情について、少しく私見を述べておく。

筆者の管見に入つた諸本において、『藤河の記』と『南都百首』が合写されたものは、架蔵本以外存在しない。架蔵本の書写時期を、既述の通り、江戸最末期乃至幕末とすると、自然な連想として、群書類従所収の転写・合写と想像したくなる。しかしながら、この見込みは成り立たない。

『南都百首』の諸本は大きく二系統に分かたれることは、前掲拙稿で述べた

通りである。その分類基準を以下に示すと、

#### (1) 序文における脱落

第一類：のりのしの門をは心さすといへともはな香のつとめに物うくして  
いたつらにあかしくらし(傍線引用者)

第二類：法の師の門をはこころさせともいたつらにあかしくらし

#### (2) 内題の有無

第一類：詠百首和歌 桑門覚恵

第二類：ナシ

#### (3) 「若菜」題の歌の有無

第一類：アリ

第二類：ナシ

#### (4) 「氷室」と「泉」の順序

第一類：氷室↓泉

第二類：泉↓氷室

#### (5) 「藤(第二類作藤花)」題の歌の注記の有無

第一類：閑院左大臣南円堂をたて、藤氏のさかへをいのりし事を思よせ侍

第二類：ナシ

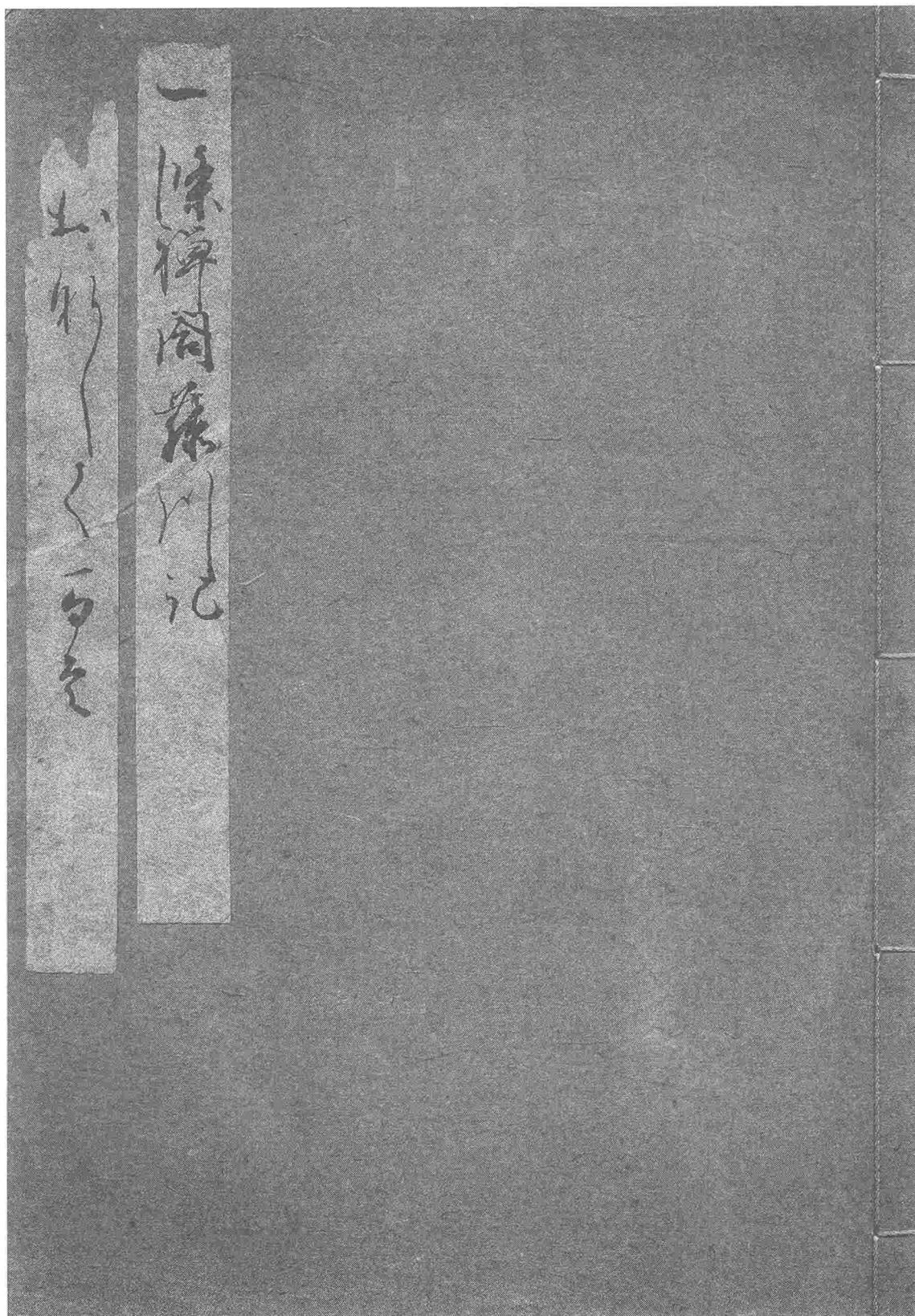
#### (6) 「七夕」題の歌の注記の有無

第一類：龍門の布さらす山ひめの事をいへり

第二類：ナシ

の六点到に統括出来る。群書類従本は第一類に属し、架蔵本は第二類に属する。従つて、群書類従本の転写本ではありえない。また細かな論述は省略するが、『藤河の記』においても同様に、群書類従本の転写本とは認められない。

要するに、架蔵本は『藤河の記』『南都百首』ともども、群書類従本の転写本ではありえないことになり、両書が合写された事情は、より複雑かつ学術的な操作の結果、といふことにならう。







【図版D】藤河の記・奥書

本云  
 此一冊者後成慈寺禪圖於園藤川  
 記之也  
 天文十三年季夏中辭日  
 桃葉  
 列アリ

【図版E】南都百首・奥書

右面是二条禪圖詠作也从自筆之由  
 書寫迄一内文也季夏仲秋下旬撰

# 公事根源諸本解題稿

◇はじめに

兼良の古典学形成過程（就中その初学期におけるそれ）を考へる際、まづ第一に取り上げるべき著作が『公事根源』であらうことは、何人もこれを否定し得ぬであらう。何となれば、兼良<sup>11</sup>20代における処女作であるといふこともさることながら、年中行事に関する兼良の唯一の体系的な著作であり、かつ後世の古典学における深甚なる影響、近世における古活字版を嚆矢とする度重なる板行等、さまざまな観点から論じられてしかるべき著作だからである。にもかかはらず、従来の研究史においては、諸論考において間歇的に引用はされるものの、小論の筆者はいはずもがな、ま正面からこれを論じたものは皆無に等しい。また、『公事根源』に比較的踏み込んで触れた数少ない論考においてすら、『公事根源』それ自身の成立過程なり伝本に触れるものは、残念ながら存しないといはざるをえない。

近時のかかる未だしき研究状況を招来した原因の一に、テキストの不備があらうかと思ふ。小論をものしてゐる今現在（二〇〇〇年秋）、『公事根源』を活字本で入手しようとしても、古書肆で贖はない限りそれは不可能である。比較的人手が容易であるべき新訂増補故実叢書本・甕公事根源新釈、そのいづれもが絶版ないし品切れとなつてゐるからだ。また仮にそれらを手し得たとしても、いづれもが江戸期の注釈書を底本としてをり、純粹な『公事根源』のテキストとはいへず、必ずしも全幅の信頼をおけるものではない。

小論の筆者は、兼良研究を志したその当初から、細々とながらも『公事根源』の伝本調査を続けて来たが、調査を始めてからおよそ20年を経た今日に至つてもなほ、所在が確認された伝本の三分の一をも調査し終へてゐない。前述のごとき研究状況を鑑み、今こそ『公事根源』のより純粹かつ純良なテキストが提供されるべき時機だと痛感したので、集中的に『公事根源』の伝

本調査を始めたところである。とはいふものの、現時点では伝本総体を把握しえてゐないため、依然として伝本の系統論にまでは未だ考へが至らぬが、見通しを得るまでの中間報告として、比較的詳細に調査し得た伝本の書誌を報告し、以て『公事根源伝本書目』の礎稿たらしめようと思ふものである。副題のよつて来たる所以は、しかく察せられたい。

## ◇公事根源の構成

多数の異版が通行してゐる点を鑑み、比較的近年復刊された関根正直『甕公事根源新釈』を事実上の流布本と仮に見做し、同本（以下「基準本」ト仮称ス）によつて『公事根源』の構成を以下に掲げてみる。通番号を私に付した。

### 正月

- |       |       |       |      |       |        |         |       |       |        |       |         |         |        |        |        |       |         |        |           |         |        |         |         |           |        |       |         |       |       |           |       |       |            |         |        |         |         |         |
|-------|-------|-------|------|-------|--------|---------|-------|-------|--------|-------|---------|---------|--------|--------|--------|-------|---------|--------|-----------|---------|--------|---------|---------|-----------|--------|-------|---------|-------|-------|-----------|-------|-------|------------|---------|--------|---------|---------|---------|
| 1 四方拝 | 2 供御葉 | 3 御節供 | 4 朝賀 | 5 小朝拝 | 6 元日節会 | 7 内侍所御供 | 8 供若水 | 9 供若菜 | 10 子日遊 | 11 御杖 | 12 二宮大饗 | 13 朝親行幸 | 14 臨時客 | 15 視告朔 | 16 御国忌 | 17 叙位 | 18 白馬節会 | 19 御齋会 | 20 真言院御修法 | 21 太元帥法 | 22 女叙位 | 23 給女王祿 | 24 県召除目 | 25 御齋会内論義 | 26 献御粥 | 27 御薪 | 28 踏歌節会 | 29 射礼 | 30 賭弓 | 31 仁寿殿観音供 | 32 内宴 | 33 国忌 | 34 神祇官献御贖物 | 35 外記政始 | 36 吉書奏 | 37 七瀬御祓 | 38 火災御祭 | 39 代厄御祭 |
|-------|-------|-------|------|-------|--------|---------|-------|-------|--------|-------|---------|---------|--------|--------|--------|-------|---------|--------|-----------|---------|--------|---------|---------|-----------|--------|-------|---------|-------|-------|-----------|-------|-------|------------|---------|--------|---------|---------|---------|
- 二月
- |      |       |       |         |        |       |      |         |         |          |        |         |
|------|-------|-------|---------|--------|-------|------|---------|---------|----------|--------|---------|
| 1 積奠 | 2 春日祭 | 3 率川祭 | 4 園並韓神祭 | 5 大原野祭 | 6 祈年祭 | 7 列見 | 8 北野御忌日 | 9 祈年穀奉幣 | 10 臨時仁王会 | 11 位祿定 | 12 季御読経 |
|------|-------|-------|---------|--------|-------|------|---------|---------|----------|--------|---------|
- 三月
- |      |       |          |          |       |        |         |
|------|-------|----------|----------|-------|--------|---------|
| 1 御灯 | 2 曲水宴 | 3 薬師寺最勝会 | 4 石清水臨時祭 | 5 鎮花祭 | 6 京官除目 | 7 東大寺授戒 |
|------|-------|----------|----------|-------|--------|---------|

四月

- 1 告朔・斎院御禊 2 更衣 3 孟夏旬 4 貢水 5 大神祭 6 稻荷祭
- 7 山科祭 8 平野祭 9 松尾祭 10 杜本祭 11 当麻祭 12 当宗祭 13 梅
- 宮祭 14 広瀬滝田祭 15 擬階奏 16 灌仏 17 伊勢神衣祭 18 日吉祭 19
- 賀茂国祭 20 関白賀茂詣 21 賀茂祭 22 中山祭 23 吉田祭 24 駒牽 25
- 新日吉祭 26 三枝祭

五月

- 1 献菖蒲 2 五日節会 3 端午節 4 左右近馬場騎射 5 紫野今宮祭
- 6 有無日 7 最勝講 8 賑給 9 着欽政

六月

- 1 御贖物 2 供忌火御飯 3 供體酒 4 延暦寺六月会 5 御礼御卜奏
- 6 月次祭 7 神今食 8 供解斎御粥 9 祇園御霊会 10 祇園臨時祭 11
- 節折 12 大祓 13 鎮火祭 14 道饗祭 15 施米 16 雷鳴陣

七月

- 1 広瀬滝田祭 2 七日御節供 3 乞巧奠 4 文珠会 5 孟蘭盆 6 相撲
- 7 祈年穀奉幣 8 仁王会

八月

- 1 八朔風俗 2 積奠 3 北野祭 4 定考 5 石清水放生会 6 駒牽 7
- 季御読経

九月

- 1 御灯 2 不堪田奏 3 重陽宴 4 例幣 5 撰虫

十月

- 1 旬・朔日 2 豕子餅 3 射場始 4 残菊宴 5 興福寺法華会 6 維摩
- 会 7 大粮申文 8 初雪見参

十一月

- 1 御贖物 2 供忌火御飯 3 御曆奏 4 朔旦冬至 5 相嘗祭 6 宗像祭
- 7 山科祭 8 平野祭 9 春日祭 10 杜本祭 11 当麻祭 12 率川祭 13

- 梅宮祭 14 当宗祭 15 中山祭 16 松尾祭 17 大原野祭 18 園並韓神祭

- 19 五節 20 鎮魂祭 21 新嘗祭 22 豊明節会 23 吉田祭 24 日吉祭 25 日
- 吉臨時祭 26 賀茂 臨時祭

十二月

- 1 供忌火御飯 2 大神祭 3 国忌 4 御体御卜奏 5 月次祭・神今食
- 6 御仏名 7 御髪上 8 立土牛童子像 9 荷前 10 着欽政 11 内侍所御
- 神楽 12 追儺

◇伝本書誌

1 静嘉堂文庫蔵A本〔五三六・二〇・二四六三三〕

袋綴装1冊。29×20・5cm。黄土色地横縞刷文様の表紙。表紙中央に題簽が貼られ「公事根元慶安写本」と墨書される(本文と別筆、後のもの)。内題は存しない。本文料紙は楮斐混漉。巻首に三顆蔵書印が捺される。「静嘉堂文庫」(長方朱印、子持枠)「松井/蔵書」(縦長円朱印)「印文不明」(涙型墨印、陰刻)。1面14行書。遊紙はなく、墨付五七丁。全巻にわたつて朱引が存する。巻末に本文と同筆で「慶安四年武州桜田庄ニテ写早」と奥書がある。この折(一六五一年)の書写と見て良い。全巻にわたつて、墨筆・朱筆にそのまま振り仮名が施される。12月の記事中に基準本に見えない以下の二項の記事が、11内侍所御神楽と12追儺との間にある。

12-11 a 御贖物 卅日/六月におなし

12-11 b 大祓 同日/是も六月に同じ

2 静嘉堂文庫蔵B本〔七八・五八・一二九七八〕

袋綴装1冊。29・3×20・5cm。茶無地の後補表紙。表紙左に題簽が貼られ「公事根元」と墨書される。内題は存しない。本文料紙は楮紙。蔵書印が巻首に四顆巻尾に一顆捺される。巻首に「宮島本」(長方朱印)「宮島/文庫」(方朱印)「静嘉堂文庫」(長方朱印、子持枠)「印文墨ニテ

抹消」(長方印)、巻尾に「宮島／文庫」(方朱印)。東京本所二葉町・大通丸葉舗(源泉堂)主人宮島藤吉(一〇九)旧蔵(静嘉堂文庫編『静嘉堂文庫の古典籍 第三回日本の貴重書』(平10・12) iv頁参看)。  
1面11行書。遊紙はなく、墨付七四丁。全巻にわたって、墨筆(本文と同筆か)で振り仮名が施される。奥書・識語は存しない。江戸初期写。  
12-11 a・12-11 bあり。

### 3 蓬左文庫蔵本(一〇一・一一)

本書に関しては、既に『名古屋市蓬左文庫善本解題図録 第一集』(昭55・8) 15-16頁に、図版と共に書誌が記載されてゐる。今回、原本を直接調査することが出来たので、以下、筆者の調査に基づく書誌データを報告することにした。

袋綴装2冊。28・3×22・3 cm。茶無地の表紙(後補か)。表紙左に「年中行事 共ニ乾(坤)」と墨書される(本文と別筆)。内題は存しない。本文料紙は楮紙。乾坤冊共に巻首に蔵書印二顆が捺される。即ち、「御／本」(方朱印)「尾家／文庫／図書」(方朱印)。前者の蔵書印より、駿河御譲本と知られる。1面10行。遊紙は乾坤冊ともに存せず、墨付は乾冊六九丁坤冊三一丁。乾冊は一月から六月まで。ごく稀に墨筆で振り仮名が施される(同筆か)。乾冊前表紙見返し中央に貼紙があり、本文とは別筆で「永廿九年年中行事／二冊」と墨書される。乾冊末尾に本文と同筆で「永廿九年正月十二日書之早／内大臣／備為嬰兒也外見有憚」と奥書がある。上巻末尾に奥書が記されるのが本書の一特徴である。室町末期写。  
12-11 a・12-11 bあり。項目名の冒頭に朱で△が付される。

### 4 尊経閣文庫蔵A本(七・二四)

袋綴装1冊。14×19・3 cm(横本)。薄灰紺色無地の表紙。表紙左に「公事根源元鈔」と墨書される(本文と別筆)。内題は存しない。本文料紙は楮紙。巻頭に蔵書印一顆が捺される。即ち「前田氏／尊経閣／図書記」(方朱印)。1面15行。遊紙は巻首・巻尾に各1丁。墨付一一四丁。本

書の特徴は、巻首に目録が存することである。ただ、この目録は、他本にもまま同体裁でまみ見られるので、ある種の系統の祖本において作成された可能性が高い。目録にのみ本文と同筆で、墨・朱による補入・ミセケチ・鼈注などが記される。江戸中期写。12-11 a・12-11 bあり。

### 5 尊経閣文庫蔵B本(七・一七九・金)

袋綴装1冊。30×21・3 cm。薄灰青色無地の表紙。表紙左に「公事根源」と墨書される(本文と別筆)。この外題周辺を仔細に見るに、題簽が剝脱した跡が微かに見て取れる。この点からも、この外題は後補であると断じて良からう。内題は目録部首部に「公事根源」。本文料紙は楮斐混漉。蔵書印は目録首部に二顆捺される。即ち「学」(円朱印)「石川県勸／林図書館／図書室印」(長方朱印)。また本文首部にも一顆後者の蔵書印が捺される。1面10行。遊紙は巻首・巻尾に各1丁。墨付一一二丁。本書の特徴は、④尊経閣A本と同じく、目録を有する点にある。また目録の体裁も酷似するので、兄弟関係を想定できなくもないが、本書には本文中に詳細な振り仮名(同筆)を持ち、尊経閣A本にはこの振り仮名が皆無である点、本書には内題として目録題があるが、尊経閣A本にはこれがないなど、兄弟本と断ずるに躊躇される点もあり、これら二本の関係を即断しにくい。江戸初期写。12-11 a・12-11 bあり。

### 6 内閣文庫蔵A本(一四五・五八)

袋綴装1冊。26×19・7 cm。表紙は茶地に朱の輪繫花刷文様。表紙左に「公事根源」と墨書される(本文と同筆か)。内題は存しない。本文料紙は楮紙。蔵書印は、表紙左上及び巻尾に「昌平坂／学問所」(長方墨印)、前表紙見返中央貼紙及び巻首に「日本／政府／図書」(方朱印)、巻首に「林氏／蔵書」(方朱印)「江雲渭樹」(長方朱印)「秘閣／図書／之章」(二種アリ、方朱印)「一字不読」学／蔵書」(方朱印)。1面13行。遊紙はなく、墨付のみ六〇丁。巻末に本文とは別筆と覚しき手で「永廿九年正月十二日書之早／内大臣／偏為嬰兒也有憚」右の本ハ後成恩

寺の殿下いまたうちのおとと申侍りける比しをかせ給ぬあまねく世に流布せざるにや此本／うちの卿内へめさるゝ由申されしをかた時の程とてかりみたりの筆をもて文龜三のとし末の秋中の十日にうつし／侍りぬ彼本にせかきにうつしたる本なれば筆の跡たし／かならずかたのやうにうつしと、めぬのちにせう本にてよ／みあはずへき者也／ましはりはかるおほき三のくらの藤基春」と奥書がある。林羅山（一五八三—一六五七）旧蔵。江戸初期写。12 | 11 a・12 | 11 b あり。

#### 7 内閣文庫蔵B本（一四五・五三）

袋綴装2冊。24×16・8 cm。表紙は紺無地。表紙左に題簽（紺地絹布）が貼られ「公事根源 本（末）」と墨書される（本文と別筆）。内題は存しない。本文料紙は楮紙。蔵書印は巻首に四顆捺される（両冊共）。「書籍／館印」（方朱印）「日本／政府／図書」（方朱印）「和学講談所」（長方朱印、双郭）「浅草文庫」（長方朱印、双郭）。1面11行。遊紙はなく、墨付のみ本冊六四丁末冊四六丁。全巻にわたって、朱・墨で書入れが存する（本文と同筆か）。本奥書と覚しきものが巻末に以下のやうにある。「兼如本／朱ヲ以テ引ケル点ハ以前本ニ在之幽斎／御本ニ無之叟ニ引也 同事ナルヲハ一切点ヲ不引幽斎御本ハ菊亭殿中院殿<sub>註</sub>／読合ニテノ御シラヘノ本也句キリ朱引ハ」幽斎御本ヲ写者也／（一行分空白）／後成恩寺関白兼良公作也／（三行分空白）／右根源抄依柳営御所望後成恩寺／関白兼良公于時生年十九歳不披見／一紙之所被書進云、。江戸中期写。12 | 11 a・12 | 11 b あり。

#### 8 東京教育大学（筑波大学）附属図書館蔵本（ム・二一五・七〇）

袋綴装1冊。29×20・5 cm。丁子引横縞文様の表紙。表紙左に外題が「<sub>模本標</sub>公事根源抄」と墨書される。内題は存しない。本文料紙は楮紙。蔵書印が巻首に二顆捺される。「東京師範学校／図書印」（方朱印）、「印文不明」（円朱印）。首部に遊紙1丁が置かれ、墨付は五二丁。奥書・識語が以下のやうに存する。

応永廿九年正月十二日書之早

内大臣（朱筆）

備為嬰兒也外見有憚」51ウ

右根源抄依<sub>註</sub>柳営<sub>註</sub>所望後成恩寺関白<sub>註</sub>藤原朝臣<sub>註</sub>于時生年

不披見一昏之所見被書進之云奇特神妙也

此本式仁所持也間借用雇山井安藝守大神

景範筆令書写早不可有他見者也

于時享祿三年仲秋上幹

從四位上行近衛權少將兼内蔵頭藤原朝臣（印文摸写）言

繼（花押）」52ウ

。応永廿九年兼良公廿一才于時内大臣正二位左近衛大将。柳営義政公

応永廿九年征夷大將軍從一位前内大臣。山井安藝守大神景範未考

禁裏御樂人。式仁在仁誤欵

。從四位上右近衛權中將兼内蔵頭藤原言繼<sub>トキ</sub> 山科家從二位中納言言綱

男

。自応永廿九年三百六十一年自享祿三年二百五十二年

天明元年丑十一月 秘書監 河村秀穎考

識語にある通り、天明元年河村秀穎の書写と見て良いだらう。12 | 11 a

・12 | 11 b あり。

#### 9 熊本大学附属図書館寄託北岡文庫（永青文庫）蔵本（一〇七・三六・二）

国文学研究資料館蔵紙焼本（N二五八八）による調査。原本未調。

袋綴装1冊。表紙左に題簽が貼られ「公事根源抄」と墨書される。内題

は存しない。目録あり。1面11行。七月「仁王会」までの零本。墨付六

八丁。巻末に以下の奥書がある。

此抄以吉田二品兼右卿本書写之処

筆跡狼藉之間更借也足軒之手

写之同加仮名其後受右相府菊亭殿

御説可為證本耳

文祿第四曆仲秋上澣

法印玄旨（花押）

この奥書は花押から推すに幽齋筆かと思はれるが、本文は明らかにこれとは別筆。12-11 a・12-11 bあり。

10 上田市立図書館藤廬文庫蔵本（歴地・二五二）

国文学研究資料館蔵マイクロフィルム（九四・七・一）による調査。原本未調。

袋綴装2冊。表紙左に題簽が貼られ、「公事根源 上春（下〔夏／秋／冬〕）」と墨書される。内題は存しない。巻首に蔵書印が三顆捺される。「藤廬」（六角印）「藤本」（方印）「檀本蔵」（長方印）。1面8行。巻末に以下の奥書がある。

応永廿九年正月十二日書之畢

偏ニ為嬰兒也外見有憚 内大臣

（一行空白）

写本を借得て写本する所□□□又□□

正書を尋求朱を以改正す 藤はら保右

後成恩寺関白兼良公作也

<sup>一本ノ奥書</sup>右根元抄依柳宮御所望後成恩寺関

白杆檮欄蔵本披見一紙之書被書進之

（一行空白）

兼如本 心前本 幽齋本

幽齋本ハ菊亭殿中院殿江談合ニテ

御シラヘノ本也くきり朱引幽齋本ヨリ写ス

モノナリ

12-11 a・12-11 bあり。

11 白杵市立図書館蔵本（四門歴日五五号）

国文学研究資料館蔵マイクロフィルム（二五八・二八八・四）による調査。原本未調。

袋綴装1冊。表紙中央に題簽が貼られ、「公事根元」と墨書される。内題は存しない。巻頭より「悠紀御殿……文明十年二月日」と『代始和抄』があり、その次に『公事根源』が置かれ、最後に大内裏諸殿舎に関する考証・天皇家系図等を付す。巻末に「享和二年秋八月 弥左衛門尉秋田保徴」と奥書がある。この折の書写か。12-11 a・12-11 bあり。

12 東山御文庫蔵本（一四四・二二）

宮内庁書陵部蔵マイクロフィルムからの紙焼本による調査。原本未調。袋綴装1冊。表紙に薄紙がかけられ、その左上に「一四四／二二」と墨書される。本来の外題はその薄紙に透けて見え、表紙中央やや右寄りに「公事根源上下合」と墨書される。内題は存しない。1面12行。巻頭に、経嗣・兼良・良基の著作目録が掲出される。注意すべき書誌事項を含むと覚いので、以下にその全文を翻刻する。

成恩寺殿御作

相国寺大塔供養和字記一冊 北山女院入内和字記一冊

北山行幸和字記上下二冊 御禊大嘗和字記一冊

（一行分空白）

後成恩寺殿御作

公事根源抄上下 重編職源一冊

令抄十欵一冊奥欠 江次第抄十欵卷奥欠

御讓位御即位御禊大嘗会和字抄一冊

日本書紀纂疎三冊 元亨釈書註、卷

勸修念仏記一冊

樵談治要一卷 文明一統記一卷

伊勢物語愚見抄上下 源氏物語年立一冊

花鳥余情十五冊 連珠合璧集上下

連歌新式今案追加一冊

古今和歌集秘抄一冊

歌林良材集上下

源語秘決一冊

四書童子訓二冊大学

源氏物語和字抄六冊

関藤河記一冊

筆のすさみ一冊

雲井の春一冊

東斎隨筆一冊

除官雜例一冊

(一行分空白)

後普光園撰政御作

百寮訓要鈔一冊

榊葉日記一冊

小嶋のすさみ一冊

貞治御鞠和字記\*

応安諒闇和字記一冊

思のまゝの日記一冊

白鷹記一冊

魚鳥平家一冊

愚問顯註一冊

連歌式目一冊

近來風躰一冊

さよのね覚一冊 \* 「きぬかつきと号す」ト注記アリ

墨付六十丁。卷末に以下の奥書がある。

故禅閣御抄也本為上下二冊今

為一冊可秘之

桃蹊隱叟冬良

(五行分空白)

逍遙院以本写之早

天文二年十一月廿日

12 | 11 a・12 | 11 b あり。

### 13 宮内庁書陵部蔵 A 本 (五〇九・四四)

貴重本扱ひ故原本調査不可。以下は、写真版及び書陵部蔵紙焼本〔史・九三七〕記載事項より判明することのみを記述する。

袋綴装 1冊。25・4×21・2 cm (写真版所掲スケールより算定)。表紙

は波引き。表紙左に題簽が貼られ「公事根源 全」と墨書される(本文と別筆)。内題は存しない。蔵書印は巻首に四顆捺される。「秘閣/図書

/之章」「図書/寮印」「宮内省/図書印」「□奠/図書印」。墨付五七丁。全巻にわたって墨筆で書入れが存する(本文と同筆か)。ただし、書陵

部蔵紙焼本の注記によると、以下の三箇所のみ朱筆との由。即ち、石清水臨時祭条「天曆五年」の右傍「慶印本為是」左傍「。」、節折卅日条

「ともしき」の「き」の右傍「て一本」。卷末に以下の二種類の奥書が存する。

応永廿九年正月十二日書之早

内大臣

偏為嬰兒也外見有憚

(二行分空白)

右奥。以他本注之雖令校合猶誤書

烏焉之字等□□之追而可改正而已

都護□(花押)

①②は筆跡が異なり、かつ、本文とも筆が異なるが、いづれも書本の摸写かと思はれる。書陵部の鑑定によれば室町末期写。12 | 11 a・12 | 11 b あり。

### 14 宮内庁書陵部蔵 B 本 (一七五・四七五)

袋綴装 1冊。26・3×19・8 cm。丁子引の格子刷文様。表紙左に打付書で「公事根源抄」と墨書される。内題は存しない。本文料紙は楮紙。蔵書印が巻首に二顆、巻尾に一顆捺される。巻首に「諸陵/寮図/書記」(方朱印)「図書/寮印」(方朱印)、巻尾に「奎/□」(円墨印、この上に花押が書かれる)。1面11行。遊紙はなく、墨付七六丁。全巻にわたって、墨筆・朱筆(本文と同筆か)で書入れが存する。六月の記事の末尾に朱筆で、以下の本奥書がある。

上巻云

応永廿九年正月十二日書之早

内大臣

偏為嬰兒也外見有憚

下卷

また、巻尾に、

△故禪閣御抄也本為上下

二冊今為一冊可秘く

桃蹊陰叟冬良

江戸中期写。12 | 11 a · 12 | 11 b あり。

15 宮内庁書陵部蔵 C 本 (五〇二・九一)

袋綴装 1 冊。26 · 6 × 20 · 8 cm。薄茶無地の表紙。表紙左に打付書で「公事根源抄 全」と墨書される。内題は存しない。本文料紙は楮紙。蔵書印が巻首に一顆捺され、「葉室 / 図書」(方朱印)とある。1面8行。遊紙が首部に一丁置かれ、墨付は一〇八丁。全巻にわたつて、墨筆・朱筆(本文と同筆か)で書入れが存する。巻末に以下の奥書が存する。

① 応永廿九年正月十二日書之早

偏為嬰兒也外見有憚 内大臣

② 一本奥書

右の本は後成恩寺の殿下いまたうちのおとと申侍りける此しるしをかせ給ぬあまねく世に流布せざるにや此本うちの御内へめさるゝよし申されしをかた時の程とてかりみたり筆をもて文龜三のとし末の秋中の十日うつし侍りぬ彼本よせ書に写したる本なれば筆のあとたしかならずかたのやうにうつしとめぬ後に正本いたくよみあはずべきもの也

ましはりはかるおほきみの位藤基春

◎環翠軒宗尤自筆本奥書ニ曰ましはてあそはし候本也

③ 故禪閣御抄也本為上下二冊今為一冊

桃蹊陰叟 冬良

④ 這一冊借請今出河右幕下公規卿

本予染翰於燈下遂校合畢

⑤ 或本奥書云

右先年 白后御自筆片假名本雖以之書写誤落字等多之

仍今又申出 上皇御本令誦合数ヶ書加之猶于後是以和字

可書之改者也

于時壬午夷則下幹日 參議右衛門督平時慶朱印

⑥ 此本彼是以五本遂校合撰不可出闕外也 壺安

以上の内、①③⑥は朱筆。江戸中期写。12 | 11 a · 12 | 11 b あり。

16 宮内庁書陵部蔵 D 本 (谷・二二五)

袋綴装 1 冊。26 · 4 × 19 · 9 cm。紺無地の表紙。題簽が表紙左に貼られ「公事根源」と墨書される。内題は存しない。本文料紙は鳥の子紙。蔵書印が巻首に三顆巻尾に二顆捺される。巻首「靖齋 / 図書」(方朱印、谷森善臣(一八一七〜一九一一)の蔵書印)「八雲軒」(長方藍印、陰刻、脇坂安元(一五八四〜一六五三)の蔵書印)「宮内省 / 図書印」(方朱印、

巻尾に「藤亨」(円藍印、陰刻、脇坂安元の蔵書印)「安 / 元」(方藍印、同前)。なほ、「八雲軒」「藤亨」「安元」の三種の蔵書印は、この『公事根源』から『図書寮叢刊書陵部蔵書印譜 上』(明治書院 11 平 8 · 3)に図版で掲げられてゐる(一七七〜一七八頁)。これらの蔵書印より、本書が、脇坂安元の旧蔵であつたことが確認される。因みに、現存する唯一の脇坂安元の蔵書目録かと目されてゐる金井寅之助蔵「脇坂家蔵書目録」(金井編著『松蔭學術研究叢書』八雲軒脇坂安元資料集)〔松蔭女子学院大學學術研究会 11 90 · 3〕所収) 16 丁裏に「一公事根源 一冊」と見えるものが本書のことかと思はれる。1面10行。遊紙が首部に一丁置かれ、墨付は一〇一丁。奥書・識語は存しないが、本文と同筆で「私

幽齋御本にも右之題二共二あり紙もあきてありなから／理はなし」(四月・告朔齋院御禊ノ項)「保元以後タエタルヲ建武元年再興アリシカ其後ハ打ツ、キテモ／行ハレ侍ラス 祐範本ニ如此可考」(同・孟夏旬ノ項末)などと、細川幽齋本・中臣祐範本との異同が注記される点、また脇坂安元旧蔵といふ点などから見て、江戸初期写と見て過つまい。12-11 a・12-11 b あり。

#### 17 宮内庁書陵部蔵 E 本 (庭・二六)

列帖装 1 帖 (ただし、料紙を上下に二つ折りにし、折り目の部分を下側にし、更に上下に二つ折りにした中央を綴じた変則的なもの)。21・8 × 15・2 cm。紺無地 (後補) の表紙。題簽が表紙左に貼られ「公事根源」と墨書される。本文料紙は楮紙 (黄・薄小豆色・白などの色変はり料紙を用ゐる)。蔵書印が巻首に二顆捺され、「宮内省／図書印」(方朱印)「庭田／蔵書」(方朱印) とある。1 面 9 行。料紙は、一括り・遊紙二丁墨付二二丁、二括り・墨付一八丁、三括り・墨付二六丁、四括り・墨付二〇丁、五括り・墨付一四丁、六括り・墨付一二丁、七括り・墨付四丁、八括り・遊紙六丁。奥書が、六月末尾に朱筆で「上巻云／応永廿九年正月十二日書之早／内大臣／偏為嬰兒也外見有憚」と書き入れられる。また、巻末に「本云／故禪閣御抄也本上下二冊今／為一冊可秘、」とある。江戸初期写。12-11 a・12-11 b あり。

#### 18 宮内庁書陵部蔵 F 本 (伏・二五一)

袋綴装 1 冊。26・2 × 20・2 cm。こげ茶無地の表紙。題簽 (雲形布目押文様、金泥引) が表紙左に貼られ「公事根源」と墨書される。本文料紙は楮斐混漉。巻首に蔵書印が一顆捺され、「図書／寮印」(方朱印) とある。1 面 10 行。遊紙が首部に一丁置かれ、墨付は一〇一丁。奥書・識語は存しない。ただし、17 宮内庁書陵部 D 本と同じく、幽齋本・祐範本との異同が書き入れられるので、同本と兄弟関係にあるかと推定される。江戸初期写。12-11 a・12-11 b あり。

#### 19 宮内庁書陵部蔵 G 本 (二〇五・七四)

袋綴装 1 冊。27・3 × 19・7 cm。表紙は後補で、元表紙が扉の所にあり、中央に「公事根源 全 三七丁」と墨書される。本文料紙は楮紙。巻首に蔵書印が一顆捺され、「帝室／図書／之章」(方朱印) とある。1 面 9 行。遊紙はなく、墨付のみ三五丁。奥書・識語は存しない。正月条のみの抜粋。江戸末期写。

#### 21 宮内庁書陵部蔵 H 本 (二六六・四)

袋綴装 1 冊。26・8 × 19・6 cm。『待需抄』巻十三。表紙は黄土色無地。外題が表紙左に「待需抄 十三」と墨書される。本文料紙は楮紙。巻首に蔵書印が二顆捺される。

「鷹司城南／館図書印」(長方朱印)「宮内省／図書印」(方朱印)。1 面 14 行。『神事』『年中行事』『皇年代記畧頌』『下襲并衣色抜書』『飭抄』『桃華藥葉 (抄)』を合写する。遊紙は首部に一丁置かれ、墨付は全冊で五九丁、『公事根源』のみでは三九丁。奥書が六月末尾に「校合本<sup>本云</sup>ニ云応永廿九年正月十二日書之早／内大臣／偏為嬰兒也外見有憚」とある。江戸末期写。12-11 a・12-11 b あり。

#### 21 (滋賀県西教寺) 正教坊文庫蔵「公事元源」本 (神書一番箱)

『国書総目録』『古典籍総合目録』未載。『国文学研究資料館蔵マイクロフィルム資料目録縮刷版 22』(笠間書院 11 平 12・9) 一〇九頁に「公事元源」として所掲 (後述する扉題・端作題等から想像して、所蔵機関においても同断であると思はれる)。同館蔵マイクロフィルムによつて調査したところ、『公事根源』であることが判明した。以下、マイクロフィルムによつて知りうる書誌事項のみ摘記する。

袋綴装 1 冊。約 28 × 21・5 cm。表紙は無地の紙表紙かと思はれる。外題は存しない。首部遊紙裏に「観音寺／神書四番箱／舜興蔵」とある。端作題が「公事元源亦年中行事氏云」とある。端作題に続き、目録が置かれる。巻首・巻尾に同種の蔵書印 (方、双郭) が各一顆捺されるが、写

真が不鮮明で判読出来ない。二字分の印刻があるかと思はれる。1面12行書。遊紙は首尾に各一丁置かれ、墨付九六丁。本文末尾に、以下の如き奥書がある。

応永廿九年正月十二日

備為嬰兒也外見有憚

兼見御所持也以家本写之而已

承応元年十一月観音寺舜興藏

「応永〱而已」は本文と同筆かと思はれるが、「承応」以下は明らかに別筆。一方、「承応」以下の筆と、端作題の筆蹟とは同一筆者によるものと認められるので、本書は、承応元年以前、某が書写したものを、承応元年に観音寺の舜興が感得したものと推定される（舜興が某に書写せしめたと考へるのが最も自然であるが、その旨の記述がないので、上述の如く緩やかに考へてみた）。筆蹟から見て江戸初期写か。因みに、「兼見御所持」の「兼見」とは、卜部兼右の子兼見の謂であらうから（ただし、「兼見卿」などとせず「兼見」と呼び捨てにしてゐる点、断定するにはやや問題が残るけれども）、この本と現在天理図書館吉田文庫に存する吉田本『公事根源』群（30以下で詳述）とは、何らかの交渉があったと推測される。ただし、吉田本『公事根源』群とここでいふ「家本」との関係は未詳とせざるをえない。兼見本は校合本と解するべきか。因みに、天理図書館蔵A本（三二八・七・二五）の本奥書にも、「此写本以吉田従二位兼見卿之秘本慶長元年三月写之」とあり、そのかみにおける兼見卿本の流布をしのばせる。12 | 11 a・12 | 11 bあり。全冊にわたる漢字に本文同筆で仮名を振る。

22 京都大学工学部建築学研究室蔵本（七・〇八・〇二・七九）

大和綴装1冊。26・9×19・4 cm。表紙は白無地の素紙。表紙中央に「公事根源」と外題が墨書される。巻頭に目録があり、「公事根源」と目録題あり。また端作題もあり「公事根源」とある。巻首に蔵書印が「京都

／帝国大学／図書之印」（方朱印）と捺される。1面10行書。遊紙はなく、墨付のみ一一四丁。奥書等は一切存しない。ただし、後表紙見返し右下に「赤尾所有」と墨書される。旧蔵者なるべし。12 | 11 a・12 | 11 bあり。

23 京都大学文学部図書室蔵本（旧国史研究室蔵）（国史・さ九・一一）

袋綴装1冊。26・5×20・5 cm。表紙は横縞刷毛目文様の丁子引。外題が表紙左に「公事根源」と墨書される。内題は存しない。本文料紙は楮斐混漉。巻首に蔵書印が「京都／帝国大学／図書之印」（方朱印）とある。1面15行書。遊紙は首部に一丁、墨付五四丁。奥書等は一切存しない。全冊にわたって、細字による書入注が施されてゐる。12 | 11 a・12 | 11 bあり。江戸中期写。

24 京都大学附属図書館蔵平松家旧蔵A本（平松旧蔵本・第四門・ク一）

袋綴装1冊。27・5×20・7 cm。表紙は渋引無地。題簽が表紙左に貼られ「公事根源一冊」と墨書される。内題は存しない。本文料紙は楮紙。巻首に蔵書印が二顆捺され、「平松／蔵」（方朱印）「京都／帝国大学／図書之印」（方朱印）とある。1面13行書。遊紙はなく、墨付のみ六四丁。巻尾に識語が次のやうにある。

右先年 白后御自筆片仮名雖以之

書写誤落字等多之仍今又申出

上皇御本令読合数ヶ事書加之猶于

後日以和字可書之改者也

于時壬子夷則下澣日 参議右衛門平時慶（印〳時慶）

即ち、慶長17年（一六一二）7月、西洞院時慶が書入れをした時のものである。従つて、書写はこれ以前といふことになるが、恐らく慶長17年と近接した時期の書写であらう。12 | 11 a・12 | 11 bあり。

25 京都大学附属図書館蔵平松家旧蔵B本（平松旧蔵本・第四門・ク二）

大和綴装1冊。27・5×20・7 cm。表紙は本文料紙と共紙。外題・内題

ともに存しない。本文料紙は楮紙。巻首に蔵書印が「京都／帝国大学／図書之印」（方朱印）とある。1面15行書。遊紙はなく、墨付のみ六四丁。奥書は一切存しない。漢字片仮名表記。12-11 a・12-11 bあり。江戸中期写。

26 京都大学附属図書館蔵A本（五・一七・ク・一五）

大和綴装1冊。27・2×19・9 cm。表紙は横縞刷毛目文様の丁子引。外題が表紙左に「公事根源抄」と墨書される。内題は存しない。本文料紙は楮紙。巻首に蔵書印が三顆捺され、「菊亭家蔵書」（長方朱印）「□□／（二字分判読不可）之蔵書」（方朱印）「京都／大学図／書之印」（方朱印）とある。1面8行書。首尾に遊紙が各1丁置かれ、墨付は一一〇丁。奥書は一切存しない。全冊にわたって、墨・朱で書入れが存する。12-11 a・12-11 bあり。江戸中期写。

27 京都大学附属図書館蔵B本（五・一七・ク・六）

袋綴装2冊。14・4×19 cm。表紙はこげ茶色無地。題簽が表紙左に貼られるが、上冊は剝脱、下冊のみ「公事根源抄下」と墨書される。内題は存しない。本文料紙は楮紙。巻首に蔵書印が一顆捺され「京都／帝国大学／図書之印」（方朱印）とある。1面11行書。各冊とも首尾に各一丁遊紙が置かれ、墨付は上冊八七丁下冊四二丁。下冊裏表紙見返しに、以下の如き識語が存する。

此公事根源者予暇日考之

年中行事或不出年中行事

有公事根源故<sup>出</sup>為<sup>朱</sup>便知其異同不顧

吹毛之難漫揮筆貽後來

志同者見之予宝永丙戌十

二月既望猪苗代兼行

謹跋

兼（花押）

全冊にわたって、墨・朱で書入れが存する。12-11 a・12-11 bあり。識語でいふ「宝永丙戌」は宝永3年（一七〇六）。ただし、この識語は書写されたものと覚しく、必ずしも本書の書写時期を左右するものではない。江戸中期写と見るべきか。

28 陽明文庫蔵A本（八九・二五）

袋綴装1冊。26・1×20・8 cm。表紙はこげ茶無地。題簽（赤色地、龍文）が表紙左に貼られ、「公事根元抄」と墨書される。近衛前久（一五三六-一六一二）筆（名和修の教示による）。内題は存しない。本文料紙は楮斐混漉。蔵書印は存しない。1面11行書。遊紙が首部に二丁、尾部に三丁置かれ、墨付は八二丁。巻頭一丁は「公事根源」とは別の年中行事に関する記述。その冒頭は、「七日甲斐勅旨……」。奥書が巻末に、  
応永廿九年正月十二日書之早

内大臣

偏為嬰兒也外見有憚

とある。書入れは存しない。12-11 a・12-11 bあり。室町末期写。本文も近衛前久筆か。

29 陽明文庫蔵B本（近・八九・二四）

袋綴装1冊。25・6×21 cm。表紙は白無地の鳥の子。外題が表紙左に「公事根元抄」と墨書される。内題は存しない。本文料紙は楮紙。蔵書印は存しない。1面13-14行書。遊紙が首部に二丁、尾部に三丁置かれ、墨付は五四丁。奥書は一切存しない。漢字片仮名表記。全冊にわたり紺色の不審紙が貼付される。書入れは存しない。12-11 a・12-11 bあり。室町末期写。

30 天理図書館吉田文庫蔵A本（吉二三・二二）

袋綴装1冊。26・5×21・2 cm。表紙は雲紙の鳥の子。外題が表紙左に「公事根源抄」と墨書される。内題は存しない。本文料紙は楮紙。蔵書印は巻首に二顆「吉田文庫」（長方朱印）、「幽／頭」（方朱印）、巻尾に

一類「神陽／庫」（長円朱印）と捺される。1面15行書。遊紙が首部に一丁置かれ、墨付は五五丁。奥書は一切存しない。全冊にわたり詳細な書入れ（本文同筆か）が存する。『公事根源』冒頭の記事「正月 四方 拝」に対する書入れ（表紙見返し左隅に書かる）の冒頭は以下の如し（カクカナで施された訓み・返点は略した）。「元日四方 拝」寅刻」良宗案旧記四方 拝藏人行事下 雨時於射庭殿有御 拝礼（以下略）。12 | 11 a・12 | 11 b あり。室町末期写。

31 天理図書館吉田文庫蔵B本（吉二三・二一）

袋綴装1冊。28・7×19・7cm。表紙は黄土色無地の楮紙。題簽が表紙左に貼られ、「公事根源抄」と墨書される。内題は存しない。蔵書印は巻頭に「吉田文庫」（長方朱印）一類捺されるのみ。1面16行書。遊紙が首部に一丁置かれ、その表に「七日甲斐勅旨牧（以下略）」等九行分の書入れが存する（本文とは別筆）。墨付は三九丁。巻末に以下の如き奥書が存する。

応永廿九年正月十二日書之早

内大臣兼良公

偏為嬰兒也外見有憚」

成恩寺殿御作

（以下略）※12 東山御文庫蔵本二見エルモノト同文也」

故禅閣御抄也本為上下二冊今為一冊可秘之

桃蹊隱叟冬

以如斯御奥書本重校合了 宣賢

筆 重而校合以秘本見合也

朱 文禄二年九月十八日 梵舜

此外題龍山御筆也

同筆歟

題簽が龍山（近衛前久）筆と梵舜（歟）が注記を加へてゐるわけだが、さうすると、28 陽明文庫蔵A本（八九・二五）（外題前久筆）との関係

が問題とならう。特に注意すべきは、巻頭書入れの一致で、この梵舜本の一つの親本が前久本である可能性は高い。ただし、梵舜本の持つ経嗣・兼良・良基の著作目録は前久本には見えず、直接の親子関係があるとはまでは断じきれない。また清原宣賢の書承における関与も見逃せぬ事実である。全冊にわたつて朱墨の書入れ（同筆か）が散見される。12 | 11 a・12 | 11 b あり。室町末期写。

32 天理図書館吉田文庫蔵C本（吉二三・一六六）

袋綴装1冊。27・1×19・2cm。二種の表紙が後補されてゐる。いま仮に、最も外側（従つて現状では見かけ上の表紙）のものを甲、その内側にあるもの（恐らく最初に後補された表紙）を乙、とする。甲（白無地）には、左側に打付書で「兼右卿御筆／公事根源抄 上」と墨書される。

この筆者は、後掲する弘化四年卜部（吉田）良芳の奥書と同一筆蹟であると目されるので、良芳筆と断じてよからう。従つて、後補表紙甲は、弘化四年良芳によつてなされたと推測される。次に乙（黄土色無地）には、左側に題簽が貼付され、「公事根源抄上」と墨書される。この筆蹟は良芳とは思はず、別筆である。ただし、時期的に弘化四年を相当に遡るとも思へない。むしろ、時期的に相接して後補がなされたとした方が自然である。以上二種の後補表紙の内側に本文料紙が綴ぢられてゐる。巻首に目録が配される。内題は存しない。本文料紙は楮紙。蔵書印は巻首に「天理図／書館蔵」（長方朱印）、「吉田文庫」（長方朱印）の二類が捺される。1面10 | 11行書。遊紙が首尾に各一丁置かれ、墨付は四五丁。奥書が、

兼右卿御筆也

加修補訖

弘化四丁未年十一月十九日

従三位侍従卜部良芳

とある。『吉田文庫神道書目録』以下の目録類はこの奥書により、本書

を兼右筆とするが、より厳密には伝兼右筆とすべきである。なほ、兼右自筆資料（例へば、書陵部蔵十三代集）と比較するに、筆者は依然として「伝兼右筆」と扱ふべきとの見方をとる。全冊にわたつて墨筆による書入れ（同筆）が存する。五月までの記事のみあり（零本）。室町末期、江戸極初期写。

33 天理図書館吉田文庫蔵D本（吉二三・一九）

袋綴装1冊。27・1×20cm。水色無地の表紙。中央に打付書で「公事根元抄」と墨書さる。また、首部遊紙第二丁目表左に「禁秘抄」と墨書さる。いづれも本文とは別筆かと思はれる。内題は存しない。本文料紙は楮紙。蔵書印は、首部に「神楽／舎庫」（方朱印）、「吉田文庫」（長方朱印）の二顆、尾部に「草障／之印」（方朱印、陽刻）の一顆を捺す。1面11行書。遊紙が首部に二丁尾部に一丁置かれ、墨付は六三丁。奥書が本文と同筆で、

応永廿九年正月十二日書早

内大臣

偏為嬰兒也外見有憚

正保三年五月一日

とある。書写時期はこの正保3年（一六四六）と見て良いだらう。本文と同筆で振り仮名を中心に書入れが存する。12-11a・12-11bあり。

34 天理図書館吉田文庫蔵E本（吉二三・二三）

大和綴1冊。28・6×22cm。薄茶色無地の表紙（後補）。外題が表紙中央に打付書で「公事根元 全」と墨書される。その内側に原表紙と思はれるものがあり（本文料紙と共紙）、表左中央に、

公事根元

禁秘抄

と墨書される。いづれも別筆。また本文とも別筆。巻首に目録を有する。内題は存しない。本文料紙は楮斐混漉。蔵書印は首部に一顆「吉田文庫」

（長方朱印）が捺されるのみ。1面11行書。遊紙が首尾に各二丁置かれ。墨付は九六丁。奥書が本文と同筆で、以下の如くある。

応永廿九年正月十二日書之早

内大臣

偏為嬰兒也外見有憚

成恩寺殿御作

（以下略）※⑩東山御文庫蔵本二見エルモノト同文也

故禪閣御抄也本為上下二冊今為一冊可秘之

桃蹊隱叟冬

以如斯御奥書本重校合了 宣賢

右以證本仰他筆書写令校合也

元和第九卯月廿二

龍玄（花押）

（九行分程度空白）

宝曆七年六月廿六日令修補訖 兼雄

最終行のみ本文とは別筆。書写は、元奥書末尾にある元和9年（一六二

三）龍玄写と見て良いだらう。奥書から推すに、31天理図書館吉田文庫蔵B本（二三・二一）と兄弟関係にあるか。本文と同筆・別筆で朱墨による書入れ・合点等が存する。12-11a・12-11bあり。

35 天理図書館蔵A本（三二八・七・二五）

袋綴装1冊。27・1×19・2cm。表紙は横縞刷毛目文様丁子引。外題が表紙左に打付書で「公事根源」と墨書される。なほ、表紙右上に「智」とある（墨書？）。巻首に目録を有する。内題は存しない。本文料紙は楮紙。蔵書印は首部に一顆「寿楽堂／図書記」（長方朱印）と捺されるのみ。1面12行書。遊紙はなく、本文料紙のみ七六丁。奥書が本文と同筆で、以下の如くある。

此写本以吉田從二位兼見卿之秘本慶長元年三月写之諷云

慶長書写者

寛永拾年比借失訖

応永貳拾九年正月十二日書之早

偏為嬰兒也外見有輝

内大臣

此書予運寿於知恩寺令写之

寿仙判

本文と同筆で、朱墨による書入れ・朱引等がある。12-11 a・12-11 b あり。江戸中期写。巻末受入印より、昭和45年5月1日に天理図書館(学校本部)に寄贈されたことが分かるので、『国書総目録』に所掲されてゐる天理図書館蔵普通本は本書のことではない。『国書総目録』未掲載の newly 本といふことになる。

36 天理図書館蔵 B 本 (三二八・六・四一)

袋綴装 2 冊。23・6×16・1 cm。表紙は横縞刷毛目文様丁子引。題簽が表紙左に貼られ「公事根源 上(下)」と墨書される。内題は存しない。本文料紙は斐紙。蔵書が巻頭に三顆捺される。即ち、「天理/教□」(方朱印)、「桂廼堂/図書記」(長方朱印)、「天理/図書/館印」(方朱印)。1面8行書。両冊とも遊紙はなく、墨付のみで、上冊四五丁(一月〜三月)、下冊五七丁(四月〜)。奥書が下冊に本文と同筆で、以下の如くある。

兼如本

朱ヲ以テ引タル点ハ前本ニ在之幽斎御本ニ無之事ニ引之同斗

ナルヲハ一切点ヲ不引

幽斎御本ハ菊亭殿中院殿へ読合ニテ御シラヘノ本也句キリノ朱

引ハ幽斎御本ヲ写者也

(一行分空白)

後成恩寺関白兼良公作也

右根源抄依柳宮御所所望後成恩寺関白蟻娘松好搦不披見一紙之書被

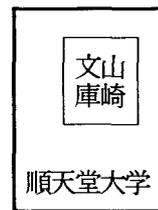
書付也之

云云

書入れは存しない。12-11 a・12-11 b あり。江戸末期写。

37 順天堂大学医学部医史学研究室山崎文庫蔵本 (山崎文庫・一四六〇)

折本 1 帖。19×8・3 cm。板表紙(後装か)。外題は存しないが、板表紙右上に「山崎佐蔵書票」のラベルが貼付され、さらに同左下に「渡部姓」と墨書される(本文とは別筆)。内題は見返しに「公事根源」と墨書される(本文と同筆)。本文料紙は厚手の楮紙。巻末に次の如き蔵書印一顆が捺される。



「山崎文庫」は陰刻・方朱印、「順天堂大学」は陽刻、全体は方朱印。一面2行書。遊紙はなく、全三二折(六四面)。識語・奥書・書入れ等は一切存しない。江戸末期写。形状から推して、書道手本か。内容は、「正月四方拜」「同供御菓」の条目のみを抄出したもの。あるいは書道手本として書写されたものか。順天堂大学図書館編『山崎文庫目録』(一九六九・三) 30頁所掲。

38 西尾市立図書館岩瀬文庫蔵本 (六一九五・七五・一一二)

原本未調査。以下は、東京大学史料編纂所蔵写真帳(六一七〇・五五・三・二)による調査。

袋綴装 1 冊。写真から推すに美濃本か。表紙は丁子引き横縞文様。外題が打付書で表紙左に「公事根源先考御筆」とある。また表紙右下には「頭左大将紀光」とあり、柳原紀光の旧蔵と知れる。端作題「公事根源」。巻頭に蔵書印が二顆捺される。即ち、「柳原庫」(長方(朱?)印、陰刻)、「岩瀬文庫」(長方印)。一面10行書。遊紙はなく、墨付のみ一〇七丁。12-11 a・12-11 b あり。識語・奥書・書入れ等は一切存しない。江戸中期写か。

39 東京大学史料編纂所蔵 A 本 (徳大寺・〇五・二九)

袋綴装1冊。29×21・1cm。丁子引き横縞波文様の表紙。表紙中央に打付書で外題があり、「公事根元」と墨書される。内題は存しない。本文料紙は楮斐混漉。巻首に二顆蔵書印が捺される。即ち、「徳大／寺／家蔵」（方朱印、陰刻）、「尚□／之印」（方朱印）。徳大寺家旧蔵本の一。一面12行書。遊紙が首尾に各二丁置かれ、墨付は六九丁。12―11a・12―11bあり。奥書が以下の如くある。

A 応永廿九年正月十二日書之早

後成恩寺殿 内大臣 \* 「後成恩寺殿」は朱筆

偏為嬰兒也外見有憚

B

了椿

C 右の本は後成恩寺の殿下いまた内のおとと申侍り

ける比しるしをかせ給ぬあまねく流布せざるにや此本

うち江内<sup>(マ)</sup>へめさるゝ由申されしをかた時のほととてかりみ

たりの筆をもて文龜三のとし末の秋中の十日にう

つし侍りぬ彼本にせかきにうつしたる本なれば筆の

あとたしかならずかたのやうにうつしとゝめぬ

のちのせう本にてよみあはすへき者也

ましはりはかるおまき

三のくらゐ藤基春

Cの持明院基春の奥書は、

6 内閣文庫蔵A本（一四五・五八）

15 宮内庁書陵部蔵C本（五〇二・九一）

に見られたものと同文。ただし、⑮本は、基春奥書を「一本」として引いている上に、基春の奥書に続けて更に種々の奥書が存してゐて、その関係はやや疎かと推されるが、⑥本は該本と同じく基春奥書で終つてゐるので、より近い系統と推定される。なほ、Bの「了椿」は、⑥⑮本いづれにも見えず、三本の関係は、必ずしも単純ではないことが予想され

る。全冊にわたり、本文と同筆で墨・朱筆による書入れが存する。江戸初期写。

40 東京大学史料編纂所蔵B本（押小路家本・く三）

袋綴装1冊。21・3×15・2cm。こげ茶色無地の表紙（後補）。表紙中央に題簽が貼られ、「公事根源 上」と墨書される。原表紙は、本文と共に、左に「公事根源 上」と墨書され、右上隅に「京」と墨書される貼紙あり。端作題が「公事根源」とある。本文料紙は楮紙。蔵書印は存しない。一面8行書。遊紙はなく、墨付のみ四一丁。墨付最終丁裏中央に朱筆で、

藤原仲

いにしへのならのみやこの宮に――

とある。12―11a・12―11bあり。奥書・識語等は存しない。「正月四方拝」から「（同月）外記政治」までを収める零本。押小路家旧蔵本。

41 東京大学史料編纂所蔵C本（押小路家本・く二・一〜三）

袋綴装3冊。20・8×15・1cm。こげ茶色無地の表紙（後補）。表紙中央に題簽が貼られ、「公事根源 上（中・下）」と墨書される。原表紙は、本文と共に、左に「公事根源 上（中・下）」と墨書され、右上隅に「京」と墨書される貼紙あり。端作題が「公事根源」とある。本文料紙は楮紙。蔵書印は存しない。一面8行書。全体の構成と墨付は以下の如し（遊紙は各冊ともに存しない）。

上冊（正月）四方拝（同月）外記政治 …… 四〇丁

中冊（正月）吉書奏（六月）大祓 …… 四八丁

下冊（六月）鎮火祭 …… 四七丁

12―11a・12―11bあり。奥書・識語等は存しない。本書上冊は、40本と装丁・内容が同一で、また筆蹟も酷似する。書写過程において密接なる関係があつたことを偲ばせる。押小路家旧蔵本。

42 東京大学史料編纂所蔵D本（二〇五七・一一六）

袋綴装1冊。26・3×18cm。表紙は丁子引き横編文様。表紙左に双郭の題簽が貼られ、「公事根源 全」と墨書される。扉題にも「公事根源 全」とある。本文料紙は楮紙。蔵書印が三顆捺される。即ち、見返しに「東京／大学／図書」（方朱印）、「史料編／纂所／書之印」（方朱印）の二顆、首部遊紙裏に「東京帝／国大学／図書印」（方朱印）の一顆である。一面10行書。遊紙が首部に一丁置かれ、墨付は一〇四丁。漢字・片仮名書。12-11a・12-11bあり。巻末に以下の奥書を存する。

A 這本者以陰陽寮在富自筆之本書

写之功早彼之本雖平仮名也予為倉

卒用片仮名者也

大永四年 甲申 卯月十五日

朱印 什證 廿六

(一行分空白)

B 右書写校合早

享保五念初冬十一日

右以善本遂再校早重而古本ヲ見合テ

可遂校合者也

享保五十二年九月九日

片仮名表記の伝本も、僅かながら他に存する。

25 京都大学附属図書館蔵平松家旧蔵B本〔平松旧蔵本・第四門・ク二〕

29 陽明文庫蔵B本〔近・八九・二四〕

がそれであるし、

15 宮内庁書陵部蔵C本〔五〇二・九一〕

24 京都大学附属図書館蔵平松家旧蔵A本〔平松旧蔵本・第四門・ク一〕の奥書に見える「白后御自筆」本も片仮名表記であつたらしい。これら片仮名本系統の祖がこの「大永四年什證書写本」であるとは断じられないこと、いふまでもないのだが、さりとて無縁とも断じられない。ともあれ、早く大永期に片仮名本が成立したことはこの奥書から判明する。

なほ、史料編纂所目録等によれば、本書は明治期の謄写本の由（ただし原本所在等は一切不明）。

43 東京大学総合図書館蔵南葵文庫旧蔵本〔G二六・八一四〕

袋綴装2冊。26×18・5cm。表紙は丁子引き刷毛目斜文様。表紙左に題簽が貼られ、「公事根源 乾（坤）」と墨書される。巻頭に目録があり、その冒頭に「公事根源目録」とある。本文料紙は楮紙。蔵書印が巻首に四顆捺される。即ち、「東京帝／国大学／図書印」（方朱印）、「離山麓／小宮山／氏蔵書」（方朱印）、「南葵／文庫」（方朱印）、「坂田／文庫」（長方朱印、双郭）。一面10行書。全体の構成と墨付等は以下の通り。

上冊 …… 正月～三月 墨付のみ五二丁

下冊 …… 四月～ 首部に遊紙一丁、墨付六七丁

12-11a・12-11bあり。下冊巻末に以下の奥書がある。

A 写本奥書ニ云

応永廿九年正月十二日書之畢

偏ニ為ニ嬰兒ノ也外見有レ憚 内大臣

B 一本奥書ニ云

右根源抄依テ柳宮ノ御所望ニ後成恩寺ノ

関白鎌頼松好時不披ヲ見セ一紙之書ヲ

被ル書ヲ進セ之ヲ云

Bの柳宮所望によつて本書が著された由を物語る奥書は、諸本に広く見られるものである。全冊にわたつて、墨・朱筆で書入れがある。なほ本書は、

南	入	購	南
	本	古	葵
文	本	紀元二千五百六十三年	
	庫	明治三十六年十二月廿一日	

といふ南葵文庫側の受入れ印があることから、明治期になつて南葵文庫

へ購入された典籍であることが分かる。

44 東海学園大学名古屋キャンパス図書館哲誠（関山）文庫蔵本（三八六・

S）

袋綴装1冊。23・2×16・6cm。表紙は、草色地に卍繋飛雲散空押文様。題簽が表紙左に貼られ「公事根源」と墨書される。端作題も「公事根源」とある。本文料紙は楮紙。蔵書印は存しない。一面12行書。遊紙が首部に一丁、尾部に六丁置かれ、墨付は八〇丁。12―11a・12―11bあり。書入・貼紙等は存しない。漢字・片仮名表記。虫損多し。『道空諦全旧蔵書目録―哲誠文庫（関山文庫）―』（東海学園女子短期大学図書館発行 昭45・6）によれば、本書は、浄土宗西山派談林・亀足山正覚寺第四十六世道空諦全上人哲誠大和尚（一八六六―一九二五）旧蔵書の一。奥書が以下の如くある。

A 兼如本

朱ヲ以テ引タル点ハ心前本ニ在之幽齋御本ニ無  
之事ニ引也同事ナルヲハ一切点ヲ不引幽齋御本  
ハ菊亭殿中院殿ニ談合ニテ御調ノ本也句キリ朱  
引ハ幽齋御本ヲ写者也

（一行空白）

B 後成恩寺関白兼良公作也

（一行空白）

C 右根源鈔依柳宮御所望後成恩寺関白頼朝好麟  
不披見一紙之書被書進之云

（一行空白）

D 右之本者園城寺権本宗羅居士所持之本也予需之  
而多日書写者也

于時文化四丁卯孟春下浣日

滋賀松風亭稿塵謹誌

書写時期はDの年時、文化4年と見て良いだらう。

これらの奥書の内、ABCは、

7 内閣文庫蔵B本（一四五・五三）

36 天理図書館蔵B本（三二八・六・四一）

にも見え、以て一系統と見做しえよう。

本書尾部遊紙第二丁表に、本文と同筆にて以下の書入れが存する。

誹諧 言ハ狂シケレ氏心ノ正ヲ云

俳諧 心モ言モ狂シ

誹\* 詩ノヤウニシタテル \*「言」ニ「唐」

誹譏 可解不可解

空戯 言ノ有ノマ、ニ云イナカス

鄙言 鄙ノ言ヲ用

狂言 ヲカシキ兒

骨藝 火ヲ水ニ云イナス

謎字 ナソナリ句ニ若餅ヤ添ヘナゲルモヤイ繩

45 名古屋大学附属図書館神宮皇学館文庫蔵本（皇・二一〇・〇九・I）  
列帖装2帖（ただし、料紙を上下に二つ折りにし、折り目の部分を下側にし、更に上下に二つ折りにした中央を綴じたもの。同一の装丁に、17宮内庁書陵部蔵E本（庭・二六）があつた）。16・6×23・5cm（横本）。表紙は渋茶色無地。題簽が表紙左に貼られ「公事根源 上（下）」と墨書される。内題は存しない。本文料紙は烏の子紙。蔵書印が巻首に三顆捺される。「神宮皇学／館大学／図書之印」（方朱印）、「本山田氏家蔵」（長方朱印）、「名古屋／大学／図書印」（方朱印）。一面12行書。紙数は以下の通り。

上冊 尾部遊紙三丁、墨付七九丁（正月―六月）

下冊 尾部遊紙五丁、墨付三五丁（七月―十二月）

12―11a・12―11bあり。朱・墨筆による書入れが多数存する。奥書は

以下の如し。

写本曰ク

幽齋御本にて校之

「幽齋御本」は、諸伝本の奥書や書入れなどに散見されるが、本書と本文のものとは存しない。江戸初期写。なほ、本書に関しては『名古屋大学蔵書目録 古書の部第一集 神宮皇学館文庫』（昭37・2）38頁に「一条兼良」二一〇・〇九・I 「公事根源」二巻 写 一七×二四cm 原本は幽齋本の校訂本」と掲出される。

46 京都府立総合資料館蔵本〔貴・三三六〕

本書の書誌に関しては、既に、京都府立総合資料館図書部編『京都府立総合資料館貴重書目録』（昭46・3）に記載を見る。以下の如し。

一条兼良著 袋三カ所綴 渋引表紙 三〇×二一・二釐 十行 墨付百十七丁 内題「公事根源」 蔵印「中原」「出納」（江戸時代初期写 原に（以下奥書ヲ引ク、略之）とあるものの写 特二五三―七）（前掲書・五八頁）

原本にあたり直した。若干補訂を要する。大和綴1冊。外題は存しない。内題は端作題。表紙は丁子引横波文様。寸法は、三〇・一×二二cmとすべきか。一面9行書。尾部に遊紙一丁が置かれる。蔵書印は、墨付第五丁（目録ノ直後、本文部分ノ冒頭）表右に二顆捺され、「中原」（長方朱印、陰刻）「出／納」（菱形朱印、双郭）。首部に目録（四丁分）がある。全冊にわたつて、朱・墨筆で書入れがなされ、また、ままた同筆にて貼紙がある。12―11a・12―11bあり。奥書は以下の通り（翻刻に際しては、前記目録の記載を参考にした）。

A 応永廿九年正月十二日書之畢 内大臣

偏為嬰兒也外見有憚」

B 右の本は後成恩寺殿下いまたうちのおとくと申侍りける比しるしをかせ給ぬあまねく世に流布せ

さるにや此外戚の卿 内江めさるゝよし申され

しをかたときの程とて借り三たりの筆を以て文

龜三のとし末の秋中の十日にうつし侍りぬ彼

本にせかきにうつしたる本なれば筆のあとたしか

ならずかたのやうにうつしとゝめぬのちにしやう

にてよみあはすへき者也

ましはりはかるおほき三のくらの藤基春」

C 《環翠軒宗尤自筆本奥書曰但真字カタカナ字まし て

あそはし 本也》

※《内ハ朱書

D 故禅閣御鈔也本為上下二冊令為一冊

桃蹊隱叟冬良

E 以如斯奥書本重校早 宣賢印」

F 斯公事根元抄者亜相兼賢卿聚考類鈔就其

宣而令書写給即以彼本速水良益染翰予授

之実可謂累世之家珍矣盖多見闕疑慎間

残事因清家環翠軒老翁華毫之本請受

賢忠朝臣文亭俾校令書加而已寛永庚辰

中原職忠印

B、Eまでは他本にもま見られる奥書である。奥書 とに示せば、

B 6 内閣文庫蔵A本（一四五・五八）

15 宮内庁書陵部蔵C本（五〇二・九一）

C 15 宮内庁書陵部蔵C本（五〇二・九一）

D 12 東山御文庫蔵本（一四四・二一）

14 宮内庁書陵部蔵B本（一七五・四七五）

15 宮内庁書陵部蔵C本（五〇二・九一）

31 天理図書館吉田文庫蔵B本（吉二三・二二）

34 天理図書館吉田文庫蔵 E 本 (吉二三・二三)

E 31 天理図書館吉田文庫蔵 B 本 (吉二三・二二)

34 天理図書館吉田文庫蔵 E 本 (吉二三・二三)

となる。ただし、奥書 F を見れば分かる通り、本書は、寛永 17 年 (庚辰) に中原職忠が清原家本を書写したものの転写本であるから、前記諸本と直接的な親子関係にはないと判断される。

47 大阪府立中之島図書館蔵本 (甲和四七六)

袋綴装 1 冊。30・6×21・7 cm。表紙は丁子引横縞文様。外題・内題は存しない。本文料紙は楮紙。首部に遊紙が一丁置かれ、墨付は五〇丁。朱筆による書入れ、朱墨筆による貼紙が存する。奥書は以下の通り。

A 応永廿九年正月十二日書之早 内大臣兼良公

偏為嬰兒也外見有憚

B 成恩寺殿御作 (以下略)

後成恩寺殿御作 (以下略)

後普光園撰政御作 (以下略)

C 故禅閣御抄也本為上下二冊令為一冊可秘之

桃蹊隱叟冬浪宣賢

D 以如斯御奥書本重校合早

重而校合以秘本見合也

B の部分は、

12 東山御文庫蔵本 (一四四・二二)

31 天理図書館吉田文庫蔵 B 本 (吉二三・二二)

34 天理図書館吉田文庫蔵 E 本 (吉二三・二三)

などに見えた、経嗣・兼良・良基の著作目録である。

C に関しては前項に記した通りである。D は、

31 天理図書館吉田文庫蔵 B 本 (吉二三・二二)

に見える。従って、系譜上本書と最も近接するであらう伝本は、31 天理

図書館吉田文庫蔵 B 本 (吉二三・二二) であると断じ得よう。ただし、吉田家本の転写本とは考へにくく、広い意味で兄弟本と解しておくのが良いだらう。なほ、奥書に続いて貼紙で、以下の如き識語がある。

右の本は後成恩寺の殿下いまたうちのおとくと申侍りける比しるしをかせ給ぬあまねく世に流布せざるにや / 此本うちの卿内へめさるよし申されしをかた時の程とてかりみたり筆をもて文龜三のとし末の秋中の / 十日に写し侍りぬ彼本にせかきに写したる本なれば筆のあとたしかならずかたのやうにうつしと、めぬ / のちに正本にてよみあはずへきものなり / ましはるはかるおほきみの位藤基春 / 故禅閣御抄也本為上下二冊今為一冊 / 桃蹊隱叟冬良 / 以如斯奥書本重校 | 宣賢印 / 此墨書ノ分板行ノ所也 (筆者曰、以上朱筆也)

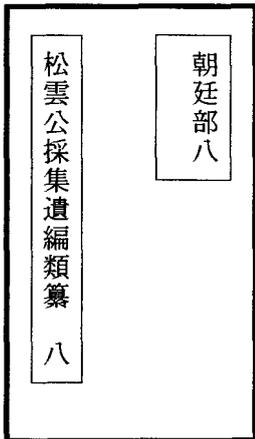
兼如本 / 朱ヲ以テ引タル点ハ前本ニ在之幽斎御本ニ無之事ニ引也 同事ナルヲハ一切点ヲ不引 / 幽斎御本ハ菊亭殿中院殿へ読合ニテ御シテノ本也句キリ朱引ハ幽斎御本ヲ写者也 / 後成恩寺兼良公作此本 彼是五本を校合猥不可出闕外也 壺安

末尾の「壺安」とは壺井義知 (一六五七〜一七三五) のこと。ただし、本文も義知の筆になるかは判断つきかねる。江戸初〜中期写。本文未精査。

48 金沢市立玉川図書館近世史料館加越能文庫蔵本 (特・一六〇三・八・一)

『松雲公採集遺編類纂』第八冊の内。袋綴装 1 冊。23・3×17・2 cm。

表紙は薄茶色無地。題簽が二種以下の如く墨書され貼付される。



内題が二種存し、扉題「松雲公遺稿古文類纂 八」、端作題「原本公事根源」と墨書される。本文料紙は楮紙。蔵書印が巻首に一顆捺され、「加越／能文／庫印」(方朱印)とある。一面7行書。『公事根源』は巻頭に置かれ、その他に八編が収められる。紙数(墨付)は以下の通り。

目録	1丁
原本公事根源	8丁
殿上淵醉	21丁
相国歴名	19丁
菅儒侍読臣、年譜	20丁
立坊学士	5丁
浴殿儒	2丁
頼朝卿状案	14丁
鹿准法付諸家	9丁
義詮將軍宣下行列附	10丁

(総計一〇九丁)

この他に、遊紙が、首部に二丁尾部に一丁置かれる。内容は、正月・四方拝から小朝拝までと、(改面した上で)雷鳴陣(抄出記事冒頭に「巻末」とあり)のみの抜粋。奥書は以下の通り。

上巻早  
 応永廿九年正月十二日書之早偏為嬰兒也外見  
 有憚 内大臣  
 右原本公事根源上巻一冊  
 存在実希世、珍本云

書写者は、本叢書の編纂者である森田平次であらうと思はれる。本書は抄出本なので、系統等も判然とはしないが、以下の点は確認の上注意しておきたい。

(1) 目録・端作題(摸写)・奥書に「原本公事根源」とあるので、親本においてもかかる記載があつたと想像される。端作題は、その直後

に墨で波線が行間に記載される。これは、親本において、多くの『公事根源』諸本がさうであるやうに、内題は存せず、外題のみであり、その外題をあたかも端作題として書写したことを示す一即ち、もともとの内題・端作題ではないことを示す所為であらうと思はれる。従つて、「原本」なる記載は、親本段階において既に存在したのだらう。むろん、「原本」といふ記載それ自身は後人の追記であらうが、本文は兼良自筆かと推される(即ち、原本と認定しうる)ほどの古写本であつたのだらう。

(2) 親本は上巻のみの零本であつた。

尊経閣文庫には、以下の『公事根源』が現蔵される。

4 尊経閣文庫蔵A本(七・二四)

5 尊経閣文庫蔵B本(七・一七九・金)

両書とも完本であり、また奥書のありやうから見て、本書との(直接的な)関係はないかと思はれる。また、調査し得た諸本に零本も存するが、やはり本書との関係はない。

49 水府明徳会彰考館蔵本(寅・六(内〇四五五二))

原本未調査。以下は、国文学研究資料館蔵紙焼本(N一五八)による調査である。

袋綴装1冊。表紙は丁子引縦編刷毛目文様。外題は打付書で以下の如くある。

年中行事 完
公事根元古写本 完

表紙見返しが剝離しあたかも首部遊紙の如くなつてゐるが、その表中央に端作題があり「年中行事 全」と墨書される。内題は存しない。巻首

に蔵書印が一顆捺され、「潜龍／閣蔵／書記」(方朱印?)とある。徳川  
齊昭(一八〇〇〜一八六〇)旧蔵。一面21行書。墨付三九丁。巻末に以  
下の如き奥書が存する。

A 這本者以陰陽寮在富自筆之本書写之功早  
彼之本雖平仮名也予為倉卒用。仮名者也

大永四年 甲申 卯月十五日 朱印 什證 紺六

B 右書写校合早

享保五念初冬十一日

C 右以善本遂再校早重而古本ヲ見合テ可

遂校合者也

享保五十二月九日

武井云、朱歟

D 宮崎氏

奥書 A・B・C は、

42 東京大学史料編纂所蔵 D 本 (二〇五七・一一六)

にも見えたものである。42 本は明治期の謄写本であるので、その原本は  
あるいは当該彰考館本である可能性もあらう。

因みに、『国書総目録』他によると、彰考館にはいま一部、三冊本(文  
化7年写)が所蔵される由だが、未調。

50 二松學舎大學附属図書館蔵本 (二一〇・〇九・K)

『国書総目録』未載。『二松學舎大學附属図書館和書目録』(昭63・3)

二六七頁所掲。帙入。帙題簽「公事根元 一条兼良編」。袋綴装2冊。  
25・3×20・1 cm。灰色無地の表紙。表紙中央に打付書で「公事根元

上(下)」と墨書される。ただし後人の手によるか。内題は存しない。

本文料紙は楮斐混漉。蔵書印が両冊巻首巻尾に各二顆捺され、「二松學  
舎大學図書館」(長方朱印、双郭)、「二松學／舎大學／図書館」(方朱印)

とある。一面10行書。紙数は以下の通り。

上冊 首部遊紙一丁、墨付五三丁(当宗祭)

下冊 首部遊紙一丁、墨付五九丁(梅宮祭)

12 | 11 a・12 | 11 b あり。朱・墨筆による書入れが多数存する。奥書は  
以下の如し。

A 応永廿九年正月十二日書早

内大臣

偏為嬰兒也外見有憚

B 文政十二己丑年夏五月

成田正次郎所蔵

正義子方(印二種アリ)

A は本文と同筆、B は後人の筆。本書にまゝ「幽斎御本」との校合がな  
される。江戸初期写(因みに、前引『二松學舎大學附属図書館和書目録』  
は書写年不明とする)。

51 東京国立博物館資料館蔵本 (和一二一〇)

『国書総目録』未載。東京国立博物館情報検索サービス古文獻検索(帝  
室本和書)データベース(<http://www.tnm.go.jp/doc/Srch/Col/MOQ1.htm>)

によつて所在を知り得たもの。東京国立博物館編『東京国立博物館  
蔵書目録 和書一』(98・3)にも所掲。袋綴装1冊。26・5×19・4

cm。紺無地の表紙。表紙左に打付書で「公事根元抄」と墨書される。内  
題は存しない。本文料紙は楮斐混漉。蔵書印が巻首に二顆捺され、「帝

国／博物館／図書」(方朱印)、「今出／河／蔵書」(方朱印)とある。後  
者は、『圖書陵叢刊 書陵部蔵書印譜 上』(明治書院 96・3)三九

頁に①として所掲されるものと同じ。今出河(菊亭)家旧蔵。一面10行。  
巻尾に遊紙が一丁置かれ、墨付は七六丁。12 | 11 a・12 | 11 b あり。朱

・墨筆による書入れが多数存する。奥書は以下の如し。

応永廿九年正月十二日書之早

後成恩寺殿  
内大臣

偏為嬰兒也外見有憚

本書には齧頭に多数の注が記される(本文と同筆歟)。多くは漢籍からの引用。料紙天部はやや広めに空白が置かれ書写されてゐるので、書写する時点で既に、本文書写後齧頭に注を施す意図があつたかと想像される。一例を示す。

後漢書云／歳首為个／朝賀其儀／夜漏未尽／七刻鐘鳴／受賀及贊／二千石以上上／殿称万歳」挙觴御坐／所賜宴饗／大作案云(正月・朝賀)

52 国立歴史民俗博物館蔵田中穰旧蔵本〔H-743-162〕

『国書総目録』未載。原本未調査。以下は紙焼本による調査。

本書に関しては、川瀬一馬『田中教忠蔵書目録』(私家版Ⅱ昭57・11)に、以下の如き記載を見る。

公事根源

一册43

寛永二十一年寫。巻首に「華山蔵書之印」朱印記を捺す。美濃本、改装。

(前掲目録三三頁)

また、国立歴史民俗博物館の「館蔵資料データベース」(<http://www.rikihaiku.ac.jp/doc/t-db-index.html>)によると(抄記)、『

【資料名称】公事根源

【コレクション名】田中穰氏旧蔵典籍古文書

【指定】指定・未指定

【数量】1

【法量】縦25・6 cm 横19・8 cm 高1・2 cm

【材質】

【実物・模造】実物

【尺度】

【製作年代】AD1644 世紀17-B 時代：江戸時代 元号：寛永

21年

【使用地】

【資料番号】H-743-162

【備考】第四三箱(三) 寛永二十一年写 典籍

とある。以下紙焼本より判明する、上記記載内容以外の書誌事項のみ記す。

袋綴装1冊。外題が表紙左に打付書で「公事根源」と墨書される。また表紙右上隅に「陸」と墨書される。かつての旧蔵書の分類メモかとおもはれる。筆蹟は外題よりも若干時代が下るか。巻頭に三丁分目録を置く。内題は存しない。一面12行書。墨付七一丁。12-11 a・12-11 bあり。まれに墨筆にてふりがな等の書入れがある(本文と同筆か)。奥書は以下の通り。

A 應永廿九年正月十二日書之早 内大臣

(二行分空白)

B 偏為嬰兒也外見有憚

(一行分空白)

C 右の本は後成恩寺の殿下いまた内のおとと申侍りける比しるしをかせ給ぬあまねく世に流希せ

らるにや此外うちの卿内へめさるゝよし申されしを

かた時の程とてかりみたり筆をもて文亀三の

とし末の秋中の十日にうつし侍りぬ彼本にせ

かきにうつしたる本なれば筆のあとたしかならず

かたのやうにうつしとゝめぬのちにせう本にてよみ

あはすへき者也

(一行分空白)

ましはりはかるおほき三のくらる藤基春

(一行分空白)

D 右如本雖至奥書等不残於一字

為慰老心書写之也恐有字之違庶幾後見人  
改之云

于時寛永廿一年九月廿四日甲刻写之終

前記目録及び歴博側のデータベースでは、末尾の寛永21年を以て書写時期と判断してゐる訳だが、筆蹟から見限る限り、首肯しうる判断である。

よしんばこの折の書写ではないとしても、江戸初期を下るとは思へない。

53 国立歴史民俗博物館蔵奈良暦師吉川家旧蔵本（H・六七九・八・九七）

『国書総目録』未載。原本未調査。以下は紙焼本による調査。

また、前掲国立歴史民俗博物館「館蔵資料データベース」によると（抄記）、

【資料名称】公事根源

【コレクション名】奈良暦師吉川家旧蔵資料

【指定】指定…未指定

【数量】1

【法量】縦24・7cm 横17・2cm

【材質】

【実物・模造】実物

【尺度】

【製作年代】AD

【使用地】

【資料番号】H167918197

【備考】厚さ…2.0cm

とある。以下紙焼本より判明する、上記記載内容以外の書誌事項のみ記す。

大和綴装1冊。外題が表紙左中央に打付書で「公事根源全」と墨書される。巻頭に三丁半分目録を置く。内題は存しない。一面8行書。墨付一一七丁。12-11a・12-11bあり。まれに墨筆にてふりがな等の書入

れがある（本文と同筆か）。奥書は以下の通り。

天明三年癸二月吉「一字分判読不可」与之

古川

末尾の「古川」は七々八文字を墨にて消して上書されてゐる。もとの文字は判読し難いが、末尾一文字は花押かとも思はれる。奥書の筆蹟と本文の筆蹟とは同一人と判断されるので、本書の書写時期は、天明3年かその少し前あたりであらう。江戸中期写といふ点は動くまい。

奥書の直前に「御内裏御殿事」といふ、通行の『公事根源』には見えぬ項目が付加されてゐる。内裏の諸門・殿舎等の概説を内容とする。

本文中に「私幽斎御本にて右之点二凡ニアリ帯ハあきて／有なからことよりはなし」（四月告朔ノ末尾）と見え、幽斎本との接触の痕跡を残してゐる。

#### 【補記】

伝本調査にあたり、蔵書の調査・写真撮影等にご便宜を頂いた所蔵機関各位にあつくお礼申し上げます。

本来ならば、伝本の系統論にまで論を及ぼすべきところであるが、いまだその段階に立ち至らない。奥書・識語などを以て、おおまかに諸本を分類することは可能であらうし、現に、小論のなかでも間歇的にはあるがそのことについて触れては来た。けれども、奥書・識語のない伝本も多く、また、応永29年の兼良の奥書のみを持つ伝本も多く、それらは分類不能とせざるをえない。それでは十全たる系統論とはなりえないと判断し、とりあへず、諸本の概要を知るために書誌的事項の記述と若干の考察を施すことで、中間報告としたい。

最後に、『国書総目録』他によつて、その存在を確認しつつも、いまだ調査に及ばなかつた伝本を以下に掲げて、以て統稿を自らに課すあかしとしたい。

〔写本〕

- (1) 東北大学狩野文庫（寛政4年写、3巻1冊）〔狩・六・三〇五四二・一〕
  - (2) 宮城教育大学〔「公事根元」、1冊、板本の写か〕
  - (3) 弘前市立図書館〔「公事根元」、文化12年写、1冊〕
  - (4) 彰考館（文化7年写、3冊）
  - (5) 神宮文庫（3冊）
  - (6) 無窮会図書館神習文庫（尾張本、2巻1冊）
  - (7) 水谷川家（1冊）
  - (8) 大阪市立大学附属図書館福田文庫
  - (9) 竜門文庫（3巻3冊）〔二〇八〕江戸初期写
  - (10) 萩毛利家（慶安4年写）
- 慶長頃写

※『臚諒猷辯致辭齋古写本・古刊本目録』（昭61・2）一五〇頁・上段所掲

※60丁（帙入）、27cm、〇年未詳林鐘（六月）中旬書写奥書

(12) 『思文閣古書資料目録』第一七四号（平13・10）所掲本

※「53年中行事抄」一冊 三五〇、〇〇〇円 江戸初期写 卷末に（略）

とあり、帙題簽は「一条兼良奥書本」とする和大 帙入り」と記載さる。

奥書部分の写真版が掲出され、

應永廿九年正月十二日書之早

内大臣

偏為嬰兒也外見有憚

とある。「年中行事抄」と掲載されてゐるところから推すに、内題は存してゐないのだらう。書写時期は、江戸初期といふよりも、元禄前後とすべきか。

〔板本〕

① 元和古活字本（3巻3冊）

お茶の水図書館成篋堂文庫

竜門文庫

国会図書館※『国書総目録』未載

出版年月〔元和年間〕／資料形態〔126〕丁・21cm・和装／注記

〔每半葉9行平仮名交り古活字版書入れあり、中山日意上人、市野

迷庵旧蔵〕／印記〔江戸市野光彦蔵書記・迷菴・市野光彦・笙歌亭〕

N D L C〔GB45〕／N D C〔210.09〕／請求記号〔WA

7・159〕

② 慶安2年刊（3巻3冊）

内閣文庫

宮内庁書陵部

（以下多数、略）

③ 刊年不明

慶応大学（1冊）

都立中央図書館加賀文庫（1冊）

鈴鹿市立図書館（1冊）

【注】

(1) 諸本の多くが以下の奥書を持つ（論述の都合上、二段に分ち、A・Bと記号を冠した）。引用は、現在までの調査の結果、比較的古態を保存してゐるかと察せられる蓬左文庫蔵〔室町末期写〕本〔一〇一・一一〕（駿河御譲本ノ一、書誌ハ後述）乾冊末尾に書されるものによる（この奥書部分に關しては諸本異同は概ね存しない）。

A 應永廿九年正月十二日書之早

内大臣

B 偏為嬰兒也外見有憚

兼良が内大臣に任ぜられたのは、前年の応永28年7月5日（公卿補任・尊經閣蔵『一条殿伝』他）だから、この「内大臣」は兼良その人と見てあやまたない（ちなみにいへば、この奥書を持たぬ伝本もまた多いし、存してゐたとしても、蓬左文庫本の如く上巻末ではなく、下巻末にあつたり（むしろこの方が多いかもしれない）、何故かこの奥書だけ朱書されてゐたりするなど、必ずしも安定的に存してゐる訳ではない。従つてこの奥書自体の信憑性を疑はうとすれば出来ぬことはない。けれども、例へば、宮内庁書陵部蔵『公事根源抄』（一七五・四七五、江戸中期写）には「△故禪閣御抄也本為上下／二冊今為一冊可秘く／桃蹊陰叟冬良」といつた息冬良の兼良作を証する識語も見え（他二、三本にも同文の識語あり）、兼良作まで疑ふ必要は、結論的には、なからうと思はれる。時に兼良21歳。ただその後の一文「偏為嬰兒也外見有憚」までが、応永29年のものと直ちに考へられない。何故ならば、兼良にとつて「嬰兒」たるべき息教房の誕生は翌応永30年であり、応永29年には未だ出生してゐないからである。むしろ、この言を一般論と解することは出来なくもないが、それでは「外見有憚」が綺麗には説明しきれないと思ふからだ。この奥書を、教房誕生と絡め、かつ、近時における『公事根源』研究史が明らかにした事実をも加へつつ敷衍すれば、次のやうにならうか。即ち、「私・兼良は、『建武年中行事』『年中行事歌合』等々、それまでの年中行事書を涉獵し、かつ自らの見解をも加へて、この年中行事書を著述した（ⅡA）。その後教房が出生し、実際に教房に与へる段になり、庭訓の書であることを追記した（ⅡB）」と。ちなみに、応仁の乱による桃華坊文庫散佚にもかかはらず、それ以前に成つた兼良の著作が（全てではないにせよ）一家家に引き続き所蔵されてゐたことは（さまざまな状況証拠から）確実で、さきに引いた冬良の識語などから見て、『公事根源』もその一本であつたのだらう。

（2）厳密にいへば、唯一とはいへないかもしれない。続群書類従・第10輯上に『年中行事大概』として収められる年中行事故実書は、年中行事を簡

略に記したものであるが、続類従本他の奥書に「此本一条殿兼良公御筆也、可秘々々、桑門御判」とあり、兼良著かと思はれてゐる。けれども、岩橋小弥太が「本書（Ⅱ年中行事大概）はそれ（Ⅱ公事根源）と比較して、恐らく同じ人の筆であろうと思はれるが、それよりもさらに簡易に、かつ通俗である……本書もまただれかに公事根源を削除略して書き与えたものであろう」（『群書類題 第五』（続群書類従完成会Ⅱ昭35・5）七六頁）と述べた通り、『公事根源』から分かれ出たものと考へるべきものゆゑ、小論では「唯一」と表現した。

（3）近世に著された『公事根源』の注釈書、といふ視点に限定しても、次のやうな著述をあげることが出来る。即ち、松下見林『公事根源集釈』（元禄7）、恕堅『公事根源抄』、源義良『公事根源抄』、河村秀根著・松永国華補『公事根源掌故』、速水常房『公事根源愚考』（明和元）、河村秀根『公事根源集釈補』、伴信友『公事根源集釈補注』、勸修寺尹隆『公事根源拔書』、滋野井公麗『公事根源抄』（京都府立総合資料館に公麗自筆本あり）などである。この他にも、某による宝暦3年の『公事根源』講釈の間書が残る（静嘉堂・書陵部・史料編纂所等蔵）。また、実際の著述における活用の一例を示せば、後掲する如く『公事根源』を所蔵してゐた（Ⅱ書陵部蔵D本）と覚しい脇坂安元は、その著『下館日記』（『八雲軒脇坂安元資料集』所収）正保元年10月8日条で、『公事根源』10月・冢子餅の所説を、『公事根源』からの引用と断らずに引用してゐる（ただし、『下館日記』に注を付した某は、目敏く『公事根源』の引用であることを指摘してゐる）、といった如きである。なほ、近代においても、高橋国憲『公事根源註釈』（私家版）Ⅱ明31、和装本、国会図書館蔵）橋純一『公事根源略』（謄写版〔私家版〕Ⅱ昭13、国会図書館蔵）など、流布はしなかつたであらう注釈書が存し、『公事根源』研究が細々とながらではあるが、依然として連綿として続いてゐたことをうかがはせる。

（4）元和古活字版（成篁堂・龍門・国会蔵）の他、慶安2年刊本、無刊記

本の存在が知られる。これら板本の精査はまだまだ行っていないが、寓目した何本かの慶安2年刊記を持つ板本においてすら、同一版下とは見做せないものが複数あり、異板による数度の刷り直しが（恐らくは複数回）行われたであらうことを想像させる。

(5) 木藤才藏「年中行事歌合と公事根源」(『二条良基の研究』〔桜楓社〕昭2・4)所収)、白山芳太郎「公事根源における神道観」(『宗教研究』61-4 || 昭63・3)、八木意知男「年中行事五十番歌合の研究」『公事根源』との関わりの中で(『女子大国文』一一四 || 平5・12)など。

(6) 一九九三年六月、明治図書出版より復刊。

(7) 関根正直著。昭和61年10月、第一書房より復刊。

(8) 故実叢書本は速水常房『公事根源愚考』、新釈は松下見林『公事根源集釈』を底本とする。

(9) 近代における『公事根源』それ自身のみテキストには、新註皇学叢書本・日本文学全書本・日本古典全集基本版等が存するが、いづれも既に稀観本であり、標準的なテキストとはなしがたい。

(10) 筆者がたまたま知り得た『国書総目録』『古典籍総合目録』未載の伝本も多い。それらの多くは本報告書の中で触れた所である。